

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 4

北 堀 貝 塚

重要遺跡範囲確認のための試掘調査

1991

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

北堀貝塚正誤表

頁	誤	正
図 版 五	。。 (2) 縄文土器 (表面)	(2) 縄文土器 (裏面)
図 版 六	。。 (2) 縄文土器 (表面)	(2) 縄文土器 (裏面)
図 版 七	。。 (2) 縄文土器 (表面)	(2) 縄文土器 (裏面)

各 位

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 青 木 豊 昭

刊行物の送付について

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび下記の報告書を刊行しましたので贈呈致します。ご活用いただければ幸いです。

また、当センターの研究に参考となる貴機関発行の報告書・資料等がございましたら、ご惠贈賜りますようお願い申し上げます。

なお、お手数ながら受領書を下記宛にご返送下さいますようお願いいたします。

記

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報4 「北堀貝塚」

受領書返送先 ☎910-21 福井市安波賀町4-10

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

受 領 書

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報4 「北堀貝塚」 部

上記のとおり受領致しました。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 青 木 豊 昭 殿

住 所

氏 名

印

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 4

北 堀 貝 塚

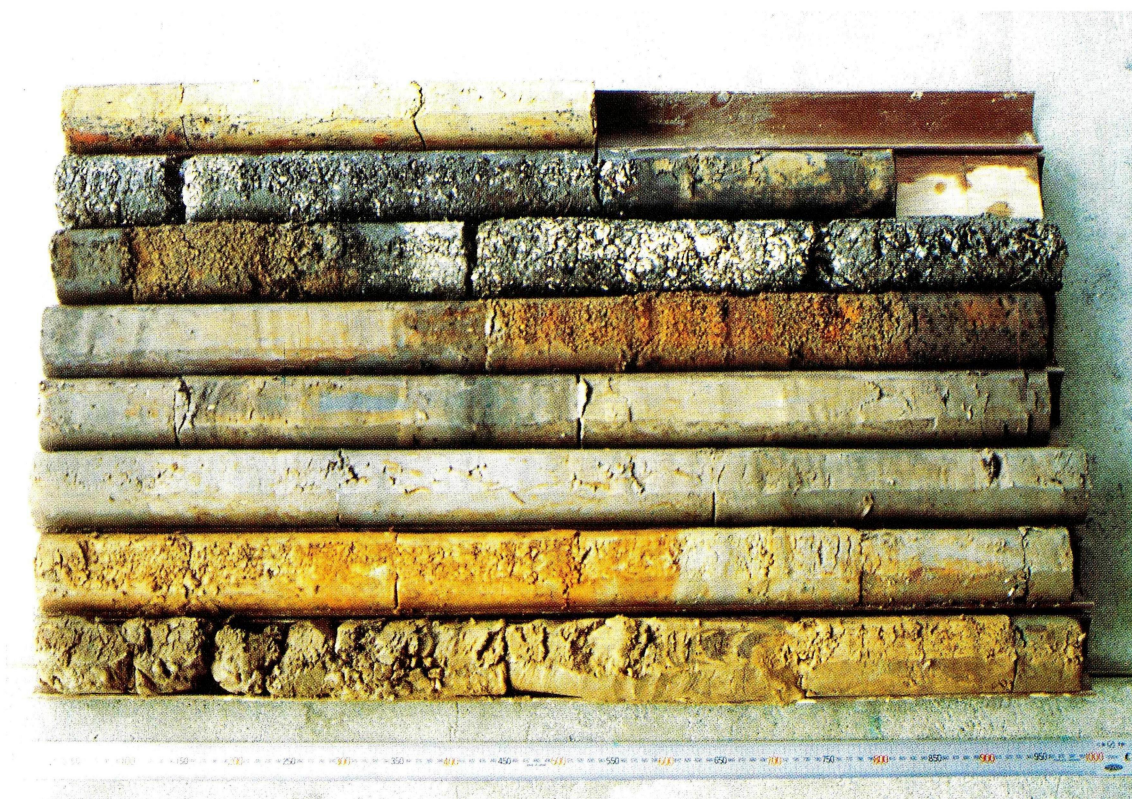
重要遺跡範囲確認のための試掘調査

1991

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



(1)遺跡全景(東方空中より)



(2)ボーリングコア採取状況(2次4番孔)

序 文

北堀貝塚の所在する福井平野西縁地域には、これまで数多くの遺跡の存在が確認されている。発見された縄文時代の遺跡はすくないが、多くは地中に埋没していると推定される。当貝塚周辺には、山や海、川に近く、古くから人間の活動や居住に好適な環境に恵まれていたことが推察される。

北堀貝塚は、すでに戦前の大正2年(1913)に、後に文化財行政担当課の社寺兵事課員になられた上田三平氏により、石器および土器、骨などを包含する縄文時代の貝殻層であることが明らかにされている。戦後の昭和28年(1953)には、遺跡の重要性から福井県指定史跡に認定されている。しかし、指定範囲が明確でないため、開発行為に対する規制は難しく、その後の日野川浚渫工事などで河床の貝塚を破壊する状況が生じた。

遺跡を保存するため、関係機関の協力を得て、貝層の遺存状況や分布範囲の確定のための調査をすることになった。ボーリングやトレンチ発掘による調査であったが、新たな成果を上げることができた。

未更毛川・日野川合流点8,000㎡にわたる貝塚部、東方29,000㎡に広がる集落部が確認され、縄文時代早期から前期にかけての貝塚を伴う大規模な低湿地性集落遺跡であることが分った。史跡指定は貝塚本体を指すものであったと考えられるが、今後集落跡を含めた史跡指定が検討される必要があると思われる。

調査にあたっては、建設省近畿地方建設局福井工事事務所はじめ関係機関の皆様、ならびに地質や自然遺物、縄文土器などの専門の先生方から多くのご指導とご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

平成3年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所長 藤原武二

例 言

1. 本書は、国の補助をうけて、昭和61年（1986）度から平成2年（1990）度に、重要遺跡範囲確認調査事業として実施した、福井県福井市北堀町地先に所在する福井県指定史跡北堀貝塚の、試掘調査報告書である。
2. 調査は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、仁科 章，山口 充，工藤俊樹が担当した。
3. 出土遺物の整理・報告書の作成は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて工藤が担当・実施した。
4. 本書本編の執筆は、第1章第1節を木下哲夫氏が行い、これ以外を工藤が行った。また、遺物実測・写真撮影・編集は工藤が行った。
5. 土層説明中に記した「攪乱」は、ボーリングコア内で混濁した層位を示す。また、「表採」はボーリング掘進中にコアを遊離した遺物を示す。
6. ヤマトシジミ計測表に記した完存殻の大型・小型の別は、殻幅2.5cmを基準とした。
7. 本書図版中の動物遺存体写真は2倍を基本とし、これを外れる品については、拡大率を表示した。
8. 遺跡出土の貝類・骨類の鑑定は早稲田大学金子浩昌氏に依頼し、その結果は本書付編1に記した。
9. 既存資料のうち、土器については木下哲夫氏に検討を依頼し、その結果は本書付編2に記した。
10. 事業のうち、ボーリング調査および遺跡周辺の地形測量については、ジビル調査設計株式会社に委託した。
11. 本報告にかかる出土遺物および記録図面・写真等は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
12. 北堀貝塚の試掘調査および遺物整理において、次の機関から協力を賜った。
建設省近畿地方建設局福井工事事務所，福井市教育委員会，福井市郷土歴史博物館，福井市安居公民館
13. 本書の執筆に当っては次の方々から有益な御指導・御助言を頂いた。記して謝意を表したい。
東 洋一，網谷克彦，土肥 孝，松井政信，南 洋一郎
14. 発掘調査・遺物整理には、次の方々の参加・協力を得た。
発掘調査 相沢豊作，木下常治，定 貞雄，定 治男，定 政吉，阪本正一，島田藤子，
西村光治，西本義雄，森沢 啓
遺物整理 宇野和子，木村恵美，竹内順子，細田栄子，吉川みどり

目 次

	頁
第1章 調査の経過	1
第1節 遺跡の来歴	1
第2節 調査に至る経緯	3
第3節 調査の経過	5
第2章 北堀貝塚の位置と周辺の地理的・歴史的環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の方法と成果	13
第1節 調査の方法	13
第2節 調査の概要	14
A 地形概況	14
B 土 層	15
C 出土遺物	20
第4章 まとめ	21
付編1 北堀貝塚出土の動物遺存体	23
付編2 北堀貝塚採集の縄文土器について	31

図 版 目 次

巻首図版	本文対照頁
(1) 遺跡全景	7
(2) ボーリングコア採取状況	15
図版第 1 遺跡	
(1) 遺跡全景	7
(2) ボーリング調査実施状況	13
図版第 2 出土動物遺存体 (1)	23
図版第 3 出土動物遺存体 (2)	23
図版第 4 出土動物遺存体 (3)	24
図版第 5 既存の資料 (1)	
(1) 縄文土器	33
(2) 縄文土器	33
図版第 6 既存の資料 (2)	
(1) 縄文土器	34
(2) 縄文土器	34
図版第 7 既存の資料 (3)	
(1) 縄文土器・石器	35
(2) 縄文土器・石器	35
図版第 8 既存の資料 (4)	
(1) 獣骨・人骨	27
(2) 人骨	27

挿 図 目 次

	頁
第1図 遺跡周辺地形測量図	3
第2図 福井県の地形区分	7
第3図 福井平野の地形	8
第4図 北堀貝塚周辺の遺跡	9
第5図 ボーリング試錐機構造図	13
第6図 試掘調査地点図	14
第7図 貝塚部土層断面作成地点図	16
第8図 土層柱状断面図(1)	17
第9図 遺跡東縁・南縁部土層断面作成地点図	18
第10図 土層柱状断面図(2)	19
第11図 出土遺物実測図	20
第12図 北堀貝塚範囲図	22
第13図 既存の資料(1)	33
第14図 既存の資料(2)	34
第15図 既存の資料(3)	35

表 目 次

	頁
第1表 出土貝類(ヤマトシジミ)計測一覧表	28・29
第2表 出土貝類・骨類計測一覧表	30

第1章 調査の経過

第1節 遺跡の来歴

大正2年(1913)8月に行われた未更毛川・日野川合流点の水閘建設工事を契機として発見された北堀貝塚の存在を斯界に報じたのは、当時福井師範学校教諭であった上田三平に負うところが大きい。福井県から史蹟勝地調査常任委員に任ぜられ、県内遺跡の調査を手懸けた上田は、北堀貝塚について「獨り越前に於ける大遺蹟たるのみならず本邦に於ける一大発見たるに至らん」^①と報じ、以来「爾来三回の踏査を重ねたるも」^②「爾来何回かの踏査を重ねたが」^③との記述に見られるように、該貝塚に対して深い関心を示し幾度か現地踏査を実施したようである。しかし、それらの日時については「昨年七月三十一日北堀區長定薩太郎氏より日野川減水の報告を受け再度の實地踏査を試み」^④とある大正6年(1917)7月31日に実施された踏査を、恐らく第2回目のものとして推定するに止まり、上田が当初現認した日時は明瞭でない。とは言え、第1報の「越前に於ける河川改修事業漸く進捗し大正二年八月中旬北堀區前面を流るゝ未更毛川河口に水閘敷設工事を行ひしに地下約二十尺の深處より貝殻発見せられ、次きて多数の遺物を出したる由なるも」^⑤

に見られる伝聞調の記述から、水閘敷設工事終了後の4年間(大正2～6年)の内に、何れからか連絡を受けて現地へ赴いたことが想像され、工事実施中の上田に依る現地視察はなかったであろう。これをして今日までも北堀貝塚の遺存状況について多様な解釈を発生させる因となった。

しかし、彼の観察記載は極めて詳細で、今回の調査の所見とも一致する点が多々あることは水閘敷設工事以後の貝層の遺存状況を彷彿させるものがある。第1報の「越前國丹生郡西安居村北堀の石器時代遺蹟に就て」(1917)で日野川左岸、未更毛川の兩岸を示した地図により「貝殻包含地」として囲われた貝層の範囲については、続報の「再び越前北堀の貝塚に就て」(1918)及び『福井縣史蹟勝地調査報告第一冊』(1920)では「貝殻床」として、『越前及若狹地方の史蹟』(1933)では「貝殻層」としてその範囲、堆積の状況が記述され、その内容もまた比較的一貫していることを見ても、前述したような発見時に対する推測を裏付けよう。

北堀貝塚はこのような経緯により確認されたが、以後正式な学術調査及び調査報告が僅少であるところの憾みがあるものの、諸先学の考究の対象となって来た。現在京都大学文学部博物館に北堀貝塚出土の土器破片が所蔵されているが、その来歴には「1917年 浜田耕作採集」^⑥とある。また、坂井郡坂井町長屋遺跡出土の弥生式土器破片にも同じ来歴が記載され、坂井郡坂井村(東十郷村)出土の土器・石器、坂井郡坂井村(木部村)木部東出土の異形石器の所蔵品も、同一年に地元より寄贈されている。将又、「昨夏濱田教授も一破片を見て之れは彌生式に近いと云はれた」^⑦「北堀介塚に就ては更に發掘調査の必要ある旨濱田博士は語られたり」^⑧との上田報文を鑑みれば、大正6年(1917)7月31日の上田第2次踏査と重なるかどうかは別に、同年濱田青陵が福井県内を巡見した際、北堀貝塚にも立ち寄り上田から説明を受けたであろうと考えても大過な

第1章 調査の経過

かろう。更に、北堀貝塚を訪れた研究者の内に藤岡謙二郎の名も挙げることが出来る。藤岡自身も「かつて立命、京大両方で教えた印牧邦雄君がおり、戦前に同君等と川の中にある北堀貝塚を調査したこともあった^⑧」と追想し、「昭和二十一年八月九日筆者は、北堀の貝塚で拾余名の学生と共に立命館大学教授藤岡謙二郎氏の実地指導を受け」「藤岡教授及び十名ばかりの大学生が、泥水にもぐって遺物を発掘する^⑨」という地元村誌への記載から、調査日時の前夜乃至重複について不明とは言え、河床中の調査が実施されたことを窺うことが出来る。現在三国高校郷土資料室に保管されている遺物は、この折採集されたものかも知れない。

その後、昭和28年（1953）福井県文化財保護委員会からの答申を経て、翌29年（1954）福井県指定史跡として認定されたが、その指定地域は「北堀十二字橋向二一番二番の地先」と記されるのみであった。こうして北堀貝塚の名は「縄文文化前期の代表的遺跡^⑩」「古い群は福井県三方郡鳥浜貝塚、福井市北堀貝塚、柴山潟底貝塚からなり^⑪」「爪形文・羽状縄文などの北白川下層Ⅱ式で、これを主体とする遺跡は北陸では石川県福浦遺跡、福井県北堀貝塚・鳥浜貝塚などがあり^⑫」のように各概説書に当地における代表的遺跡として取り上げられ、該地の市町村史にも「越前に於ける代表的な貝塚である^⑬」として扱われたが、その内容は上田報文と大差ないものであった。ところが「近年、周辺の耕地整理・土地造成にサンドポンプが使用されるようになってから特に河水中に没する遺跡の侵蝕は大きいものがある^⑭」に見られる日野川の浚渫工事が昭和40年（1965）実施され、上田が報じた河床の貝層の大半が破壊されてしまった。現在、安居公民館、福井市郷土歴史博物館に所蔵されている遺物はこの折採集されたものである。その後、水面下に遺存する貝層を実見した者もなく推移し、昭和59年（1984）の河川改修工事に至ったのである。

注① 上田三平 「越前國丹生郡西安居村北堀の石器時代遺蹟に就て」『考古學雜誌第七卷第七號』1917

② 上田三平 「第三章北堀介塚及び米ノ浦遺跡」『福井縣史蹟勝地調査報告第一冊』1920 福井縣内務部

③ 上田三平 「前篇三北堀貝塚」『越前及若狭地方の史蹟』1933 三秀舎

④ 上田三平 「再び越前北堀の貝塚に就て」『考古學雜誌第八卷第九號』1918

⑤ 注①に同じ

⑥ 横山浩一編 「福井市北堀町北堀貝塚」『京都大学文学部博物館考古学資料目録第1部』1960 京都大学文学部

⑦ 注④に同じ

⑧ 注②に同じ

⑨ 藤岡謙二郎 「第二部日本の旅と調査の思い出(4)中部の旅」『多兎を追う者』1974 大明堂

⑩ 齊藤与次兵衛 「第二篇第一章第三節北堀の貝塚」『伊井村誌』1954 伊井村役場

⑪ 藤森栄一 「Ⅲ各地域の縄文式土器中部」『日本考古学講座3 縄文文化』1956 河出書房

⑫ 高堀勝喜 「Ⅱ縄文文化の発展と地域性4 北陸」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』1965 河出書房新社

⑬ 鎌木義昌 「縄文前期文化 西日本」『新版考古学講座3 先史文化』1969 雄山閣

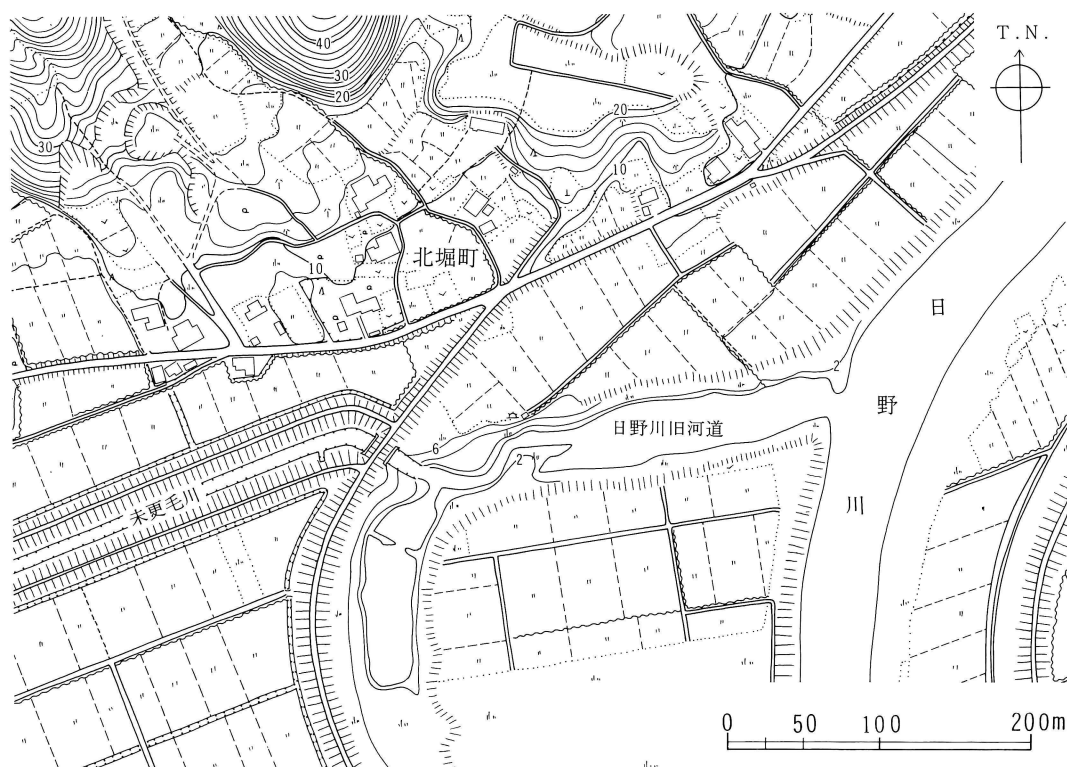
⑭ 齊藤 優 「二古代の遺跡・遺物1 北堀貝塚と石器時代遺物」『丹生郡誌』1960 丹生郡町村会

⑮ 沼 弘 「北堀遺跡(福井市北堀町)」『福井県における縄文式土器集成』1969 福井考古学研究会

第2節 調査に至る経緯

北堀貝塚の発見から現在に至る状況については、前節で記述した。昭和29年（1954）に県の史跡に指定された後も、その保護体制は必ずしも万全では無く、不備な点を多く残していた。特に問題となった事は、史跡指定地の範囲を明示していなかった点であり、その結果昭和40年（1965）には、日野川旧河道内の浚渫工事により、遺跡に重大な被害を与える事態となった。この河川浚渫による被害が極めて甚大であった事から、その後貝塚の遺存を疑問視する声も出たが、文化財を保護すべき側の対応は何等成されなかった。このような遺跡の存否すら不明な状況は、昭和50年代の末まで約20年間も続き、北堀町地先の日野川堤防上に立つ「福井県指定史跡 北堀貝塚」の石碑のみが、史跡の存在を示していたに過ぎなかった。

北堀貝塚の存在は、昭和59年（1984）12月になって再び議論を呼ぶ事となった。その契機となった事件は、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（以下 福井工事事務所と呼ぶ）が実施した、日野川旧河道の河川改修工事であった。福井工事事務所が新たに実施した改修工事区域は、昭和40年に河川の浚渫工事を実施した区域とほぼ同一の区域であったため、遺跡が存在しないものと判断し、福井県および福井市と事前の協議を行う事なく、事業に着手した。この改修工事の着工は、地元の考古愛好家の目に止まり、福井県教育庁文化課（以下、県文化課と呼ぶ）に通報され



第1図 遺跡周辺地形測量図（縮尺1/5,000）

第1章 調査の経過

る事となった。更にこの事件は、新聞紙面でも取り上げられ、福井県としての史跡保護の立場も問題とされる事となった。

県文化課は福井工事事務所河川課に対し、北堀貝塚周辺での河川改修工事について抗議し、工事の一時中断を申し入れた。また、工事の内容についても協議し、昭和40年の河川浚渫工事の範囲・深度を越える工事は実施しない事、河川改修事業区域内で立会い調査を実施する事で合意した。逆に福井工事事務所側からは、遺跡の範囲を明示する事が求められた。この合意に基づき、昭和60年（1985）1月には立会い調査を実施し、工事対象となる範囲・深度には遺跡の存在を認め得なかったため、河川改修工事の再開を認めた。この事件は県指定史跡として、本来出来るはずの無い行為であり、北堀貝塚の史跡指定以来残されてきた問題が、一機に表面化したものであったと言えよう。

福井工事事務所より申し入れのあった、「福井県指定史跡 北堀貝塚」の範囲確定作業について、県文化課は史跡管理者である福井市教育委員会文化課と協議し、昭和61年度より範囲確認調査を開始する事に決定した。事業は重要遺跡範囲確認調査事業の一環として、福井県教育委員会が事業主体となり、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが調査を実施する事とした。また、事業期間は5ヶ年の継続事業とする事で合意した。

北堀貝塚の範囲確認調査事業の目的は、史跡の指定の対象となっている貝塚の遺存状況の把握と、分布範囲を確定させる事を主眼とするものである事は言うまでも無い。しかし、今回の範囲確認調査では、遺跡の性格を貝塚を伴う縄文時代早・前期の集落遺跡と捉え、集落部分の範囲確認作業も併せて実施する事とした。また、遺跡の存続期間は、これまでに採集された遺物から早期末葉から前期前半と考えられたが、貝塚の形成が遺跡存続期間全般に亘るかは不明であり、今回の試掘調査により貝塚の時期を確定させる事も、目的の一つに加えた。このほか、遺跡の遺存する標高は、三方町鳥浜貝塚^①や福井市深坂小縄遺跡^②の調査事例から、海拔0m前後に存在すると考えられ、貝層以外からも多くの自然遺物が出土する事が考えられた。このような目的・状況を考慮して試掘調査の方法は、大口径のボーリングを使用したコアの連続採取による範囲の確認作業と、人力掘削による土層の堆積状況および遺存状況の把握作業の、2種類の方法を併用する事とした。また、貝塚および低湿地性の遺物包含層より出土する自然遺物鑑定のため、専門家の調査参加を求める事とした。

このように北堀貝塚の発掘調査事業は、遺跡発見より73年後、史跡指定より32年後に初めて実施する事となった。

注

① 鳥浜貝塚研究グループ 『鳥浜貝塚－縄文時代前期を主とする低湿地遺跡の調査1』 1979 福井県教育委員会

② 木下哲夫ほか 「福井市深坂小縄遺跡試掘調査略報」『古代第73号』 1982 早稲田大学考古学会

第3節 調査の経過

福井県指定史跡北堀貝塚の範囲確認調査は、昭和62年度から平成2年度までの5ケ年間の継続事業として実施した。遺跡の推定範囲の大半が日野川河川敷内に含まれるため、調査の実施に当たっては河川法の規定に基づく許可が必要であり、更に調査期間にも制限が加わった。調査期間は河川の減水期に当る晩秋から初春に限られたため、冬期の調査を余儀なくされた。

調査方法は、貝塚の遺存する位置・深度が不明確であり、かつ深い深度に遺存する事も予測されたため、人力による試掘調査を当初から実施する事は不適当と判断した。このため調査はボーリングにより範囲を確認し、貝層および包含層の深度・遺存状況を併せて観察する事とした。ボーリング調査は、口径80mmの土壤採取管を用いる事とし、その打ち込みにはボーリング試錐機を使用することとした。更に、貝層や包含層の遺存状況を、採取土壤により土層観察する必要がある事から、土層攪乱の少ない無水工法を主に行う事とした。また、これらボーリング調査事業は、委託事業とした。なお、人力による試掘調査は、ボーリング調査の結果に基づいて、第2年次以降で実施する事とした。

以下、各年次ごとに、調査の経過を記述することとする。

第1年次調査（昭和61年度）

昭和62年（1987）3月9日から3月31日まで調査を実施した。調査対象区域の現況は、日野川の旧河道内である。第1次調査の対象区域は、以前貝層が最も良好に遺存していたと言われる、日野川旧河道と未更毛川の合流点下流側とし、日野川旧河道の左右両岸9ヶ所で調査を実施する事とした。

調査の結果、日野川左岸の土堤際の2ヶ所で、遺物包含層と思える黒色粘質土の堆積を確認したものの、これ以外の7ヶ所では貝層・遺物包含層を検出する事はできなかった。第1次調査により、これまで最も良好に遺存していると言われてきた同所の貝層が、すでに煙滅している事が判明した。

第2年次調査（昭和62年度）

昭和63年（1988）3月15日から3月31日までの期間、第1年次調査と同様にボーリング調査を継続して実施した。第2年次調査の対象区域は、遺跡の発見者である上田三平氏の記述で貝層が遺存していたとされる、日野川旧河道と未更毛川の合流点上流側とし、日野川左岸土堤上を中心に5ヶ所で調査を実施した。調査対象区域内の現況は、日野川の河川敷内である。

調査の結果、日野川旧河道と未更毛川合流点上流側の土堤上のボーリングで、良好な貝層の遺存を確認したほか、日野川旧河道内では遺物包含層と思える黒灰色粘質土層を検出した。また、未更毛川左岸では、地山層と思える黄褐色粘質土の高まりを確認した。第2次調査で確認した貝層の遺存により、調査目的の一つであった貝層の存否確認は達成された。

なお、試掘調査とは別に、本遺跡周辺の地形測量図を500分の1で委託作成した。

第1章 調査の経過

第3年次調査（昭和63年度）

昭和63年（1988）11月5日から12月14日までの期間、調査を実施した。第2年次調査で貝塚の位置および深度の確認を終えたことから、本年度は貝塚を残した人々の生活の場である、集落部分の調査を開始する事とした。第2年次調査で実施した未更毛川左岸のボーリングデータでは、遺物包含層は比較的浅い深度に存在すると予想できたため、人力により調査を実施する事とした。調査対象区域は、日野川左岸堤防と旧河道間に挟まれた区域とし、 2×2 mの試掘坑15ヶ所を設定し調査する事とした。なお、調査対象区域の現況は、河川敷内の水田である。

調査は水門側から開始し、下流に向かって順次進めていったが、当初の予想とは大きく異なり、地表下3.5mまで掘り進めても遺物包含層を検出する事はできなかった。また、調査対象区域内の土層は、腐食物を混入する粘質土を主体としており、壁面の崩壊が著しいため、調査の危険性も考え深度を3.5mまでに止めた。第3次調査では、地表下約2.5mの暗灰色粘質土層より縄文時代晩期の所産と思える土器が1地点で出土したに止まり、縄文時代早・前期の遺物包含層を検出するには至らなかった。

第4年次調査（平成元年度）

平成2年（1990）2月15日から3月31日までの期間、調査を実施した。調査も後半に入ったことから、第2年次調査で確認した貝層の範囲確定と、第3年次調査で不調であった集落部分の遺存状況の確認を目的とし、ボーリングによる調査を実施する事とした。調査地点は、日野川堤防の外縁および、日野川旧河道の未更毛川合流点上流側を中心に設定したほか、第3年次調査区域内においても設定し、総数8ヶ所で調査を実施した。調査対象区内の現況は、河川敷および水田である。

調査の結果、貝塚部においては貝層および遺物包含層の検出は無く、その範囲を確定する事ができた。また、集落部の遺存状況確認のために実施したボーリングでは、地表下約8mで遺物包含層と思える黒灰色粘質土の堆積を確認した。

第5年次調査（平成2年度）

平成3年（1991）2月12日から2月28日までの期間、調査を実施した。第4次調査で確認した遺物包含層の範囲を確定するため、日野川堤防内の5ヶ所でボーリング調査を実施した。調査対象区の現況は、日野川河川敷内の水田である。

調査の結果、遺物包含層と思える黒灰色粘質土層を検出したほか、遺跡の南縁・東縁と判断できる土層の堆積も確認した。

以上が5ヶ年計画で実施した、北堀貝塚の範囲確認調査事業の経過である。人力による調査が不能であったため、遺構・遺物の把握には不十分な点も多いが、当初の目的は一応達成したと考える。遺跡の面積は約37,000㎡であり、うち貝塚の面積は約8,000㎡に及ぶ。また、遺跡は現地表下4～8mの深所に遺存しており、遺物包含層からは種子など自然遺物の出土も見られた。これらのことから本遺跡の性格は、低湿地性の貝塚を伴う集落遺跡と判断できた。

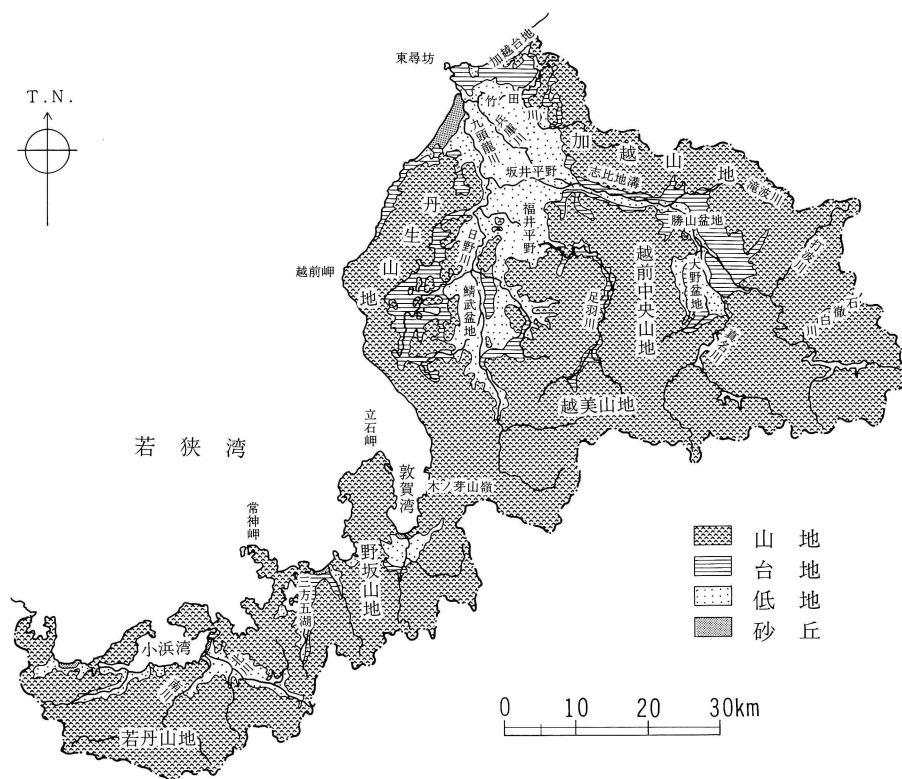
第2章 北堀貝塚の位置と周辺の地理的・歴史的環境

北堀貝塚は、福井県北部の福井市北堀町・恐神町地先に所在する。

北堀貝塚の所在する福井平野西縁地域では、これまでに数多くの遺跡の存在を確認してきた。ここでは本遺跡の所在する福井平野西縁地域の地理的環境と、本遺跡周辺に所在する主要な遺跡について、その概要を記述する事とする。

第1節 地理的環境

本州中央部の凹曲地に位置する福井県は、木ノ芽山嶺を南北の境として嶺南・嶺北と呼び分ける場合がある。福井県嶺北地方はその四周の多くが加越・越美・丹生の各山地により鎖されており、唯一県北西端の名勝「東尋坊」^{とうじんぼう}周辺が日本海への開口部となっている。嶺北地方を流れる河川の大半は、周囲各山地中より流れ出しこの開口部から日本海へと注いでいる。河川のうち主要なものとしては、加越山地中より流出し西流する九頭龍川^{くづりゅうがわ}、越美山地中より流出し西流する足羽川^{あすわがわ}および越美山地中より流出し北流する日野川^{ひのがわ}を挙げる事が出来る。また、平野の大部分は



第2図 福井県の地形区分

これら3河川の流域に形成された沖積平野であり、九頭龍川流域には大野・勝山の盆地および坂井平野が、足羽川流域には福井平野が、日野川流域には武生・鯖江の盆地がある（第2図）。

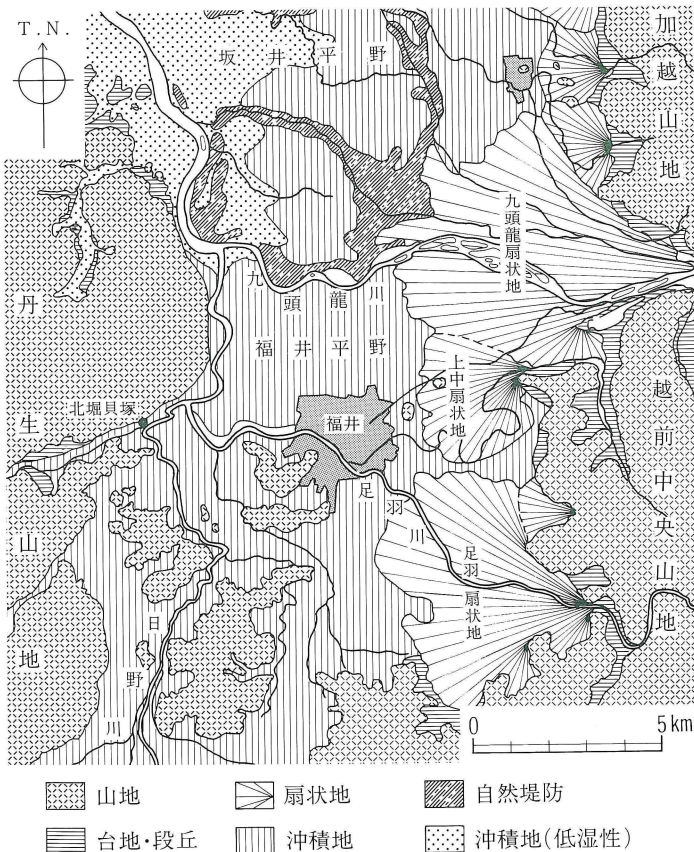
越前中央山地西側に広がる平野のうち福井平野は、北辺を九頭龍川に、西・南辺を丹生山地および丹生山地より派生した低丘陵群に画された、東西約9km、南北約11kmの区域を指す。この福井平野の地形は、大きく東西に2分出来る。福井平野は越前中央山地と丹生山地間に生じた、福井断層を軸とする凹地が河川堆積物により埋積された地形であり、その埋積量は福井市街地で約100mにも及ぶ。平野北縁を流れる九頭龍川には、平野南方から日野川が、また平野西方からは足羽川がそれぞれ流入し、平野北西端で合流している。これら主要3河川の埋積作用が、平野形成の主因となっている。この埋積地形は平野西半部で特に顕著であり、低湿な沖積地となっている。これに対し平野東半部は、越前中央山地側より流入する九頭龍・足羽の両川が形成した、九頭龍扇状地・足羽扇状地と呼ばれる、大規模な扇状地が占めており、その扇端は標高約10m付近にまで及んでいる。なお、平野南縁には扇状地の形成は無く、丹生山地より派生した独立丘陵群が、丘陵を埋積平野中に沈めて散在している（第3図）。以上が本遺跡の位置する、福井平野の地理的概況である。

的概況である。

なお、ここで本遺跡の所在する平野南西縁の地形について、やや微視的に再度説明を加えておきたい。平野西縁を蛇行しながら北流する日野川と、丹生山地中より流出し東方へと流れる小河川未更毛川は、遺跡南縁で合流している。また、遺跡が所在する平野西縁は、先述した通り山地が平野内へ埋没した地形となっている。この事から本遺跡の立地する地形は、南・東縁を日野川・未更毛川に洗われる、丹生山地西縁に派生した低丘陵上と判断できよう。

注

- ① 『日本地誌』 第10巻 1970
日本地誌研究所 なお、第
2・3図は同書より改変引用。



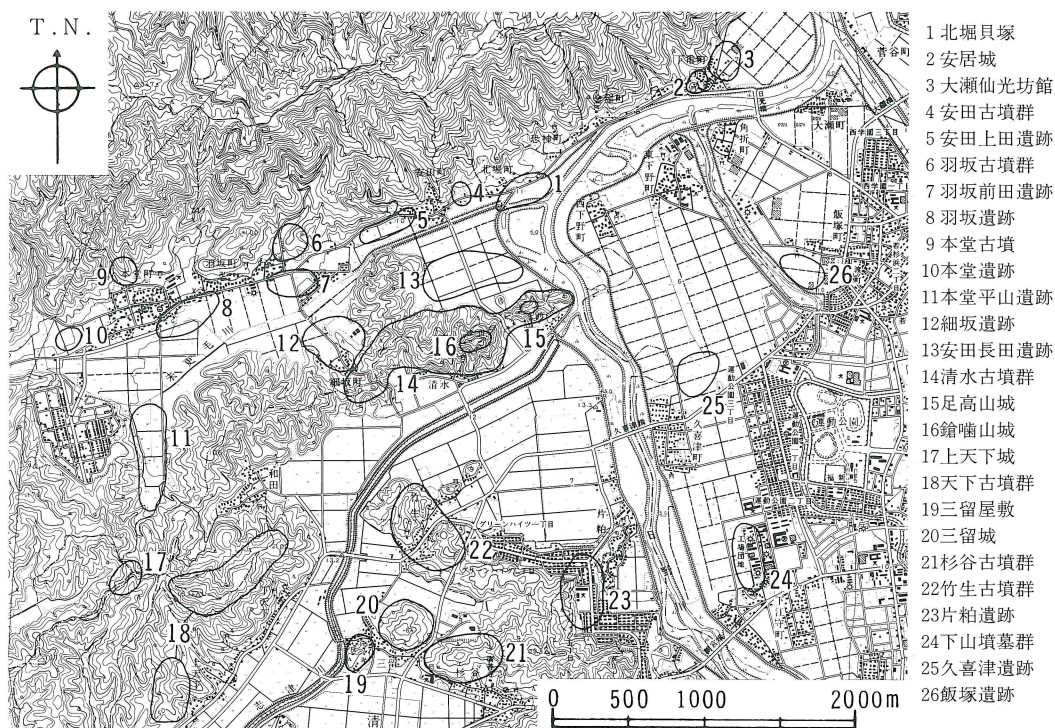
第3図 福井平野の地形

第2節 歴史的環境

北堀貝塚の所在する福井平野の西縁地域では、これまでに数多くの遺跡を確認してきた。遺跡には、沖積平野および山麓部に立地する集落遺跡のほか、山地・丘陵上に立地する古墳群・城跡などがある。ここではこれまでに確認した遺跡のうち、主要な例について時期別に概要を記すこととする。

福井平野西縁部に所在する遺跡には、縄文時代早期以降の例があり、現在のところ旧石器時代の遺跡確認はない。また縄文時代の遺跡確認例も少なく、北堀貝塚を含めても3遺跡を知るに止まる。

羽坂遺跡（第4図8） 福井市羽坂町所在。丹生山地東部の末更毛川流域に生じた小盆地内に位置する。また、遺跡の立地する地形は、末更毛川左岸に形成される小規模な河岸段丘上と判断される。平成元年（1989）県道の改良工事に伴い、福井県教育委員会が遺跡の一部を調査した^①。調査の結果、縄文時代後期前葉から晩期前半の土器・石器のほか、古墳時代前期の土師器・平安時代の須恵器なども出土した。また、埋甕5基・土壇12基など、縄文時代を中心とする遺構も検出した。これらの事から判断して羽坂遺跡は、縄文時代後期以降断続的に営まれた集落遺跡と考えられる。なお、調査区域は羽坂遺跡の北東縁に相当すると思える。



第4図 北堀貝塚周辺の遺跡(縮尺1/50,000)

片粕遺跡（第4図23） 丹生郡清水町片粕所在。日野川・未更毛川合流点南方に位置する。標高約200mの三方丘陵東麓に立地する。昭和47年(1972)宅地造成工事中に発見され、清水町教育委員会が調査を実施した^②。調査の結果、丘陵北端において縄文時代中期中葉から後葉、および後期前葉の遺物を多量に包含する埋没谷を検出したが、竪穴住居などの遺構を検出するには至らなかった。なお、時代を異にするが、弥生時代終末の竪穴住居1棟を丘陵上で検出した。

弥生時代から古墳時代の遺跡のうち集落遺跡は、調査例に乏しく不明な点が多い。安田上田遺跡（第4図5）・本堂遺跡（第4図10）・安田長田遺跡（第4図13）・久喜津遺跡（第4図25）などで、若干の遺物散布を認めるに止まる。これに対し同時代の墳墓の確認例は比較的多く、一部については調査を実施した例もある。

下山墳墓群（第4図24） 福井市下江守町所在。日野川右岸の標高約26mの低丘陵上に立地する。昭和36年（1961）に福井大学が発掘調査を実施し、方形周溝墓1基・土壇墓3基ほかを検出した。出土遺物には管玉など装飾品のほか、弥生時代終末から古墳時代前期の土器がある^③。

清水古墳群（第4図14） 福井市安田町・細坂町、丹生郡清水町清水所在。丹生山地より北東方に樹枝状に派生する、城山を中心とする標高約110mの低丘陵上に立地する。古墳群は大きく4群に分けられ、前方後円墳2、前方後方墳2（うち1基は未確定）、円墳6、方墳（または方形台状墓）12、形態不明1の総数23基で構成される。このうち城山山頂に占地する前方後円墳（9号墳）は全長約52.5mを測り、福井平野西部では大型の例となる。また、この他の前方後円墳・前方後方墳はいずれも、31～35mの全長を有している。主たる古墳の構築時期は、4～5世紀と想定されており、志津川流域の首長墓と目されている^④。

天下古墳群（第4図18） 丹生郡清水町上天下・下天下所在。丹生山地中より流出する志津川左岸に位置し、丹生山地東縁の標高約150mの丘陵上および山麓に立地する。丘陵上に立地する古墳には、全長約37.5mを測る前方後円墳1基のほか、径約15～27mの円墳6基がある。また、山麓部に立地する古墳は、一辺約12mの方墳（または方形台状墓）2基で構成される^⑤。

杉谷古墳群（第4図21） 丹生郡清水町三留^{みつどめ}所在。丹生山地東縁に点在する独立丘陵群のうち、日野川と志津川に挟まれた標高約200mの三方丘陵上に占地する。古墳群は丘陵頂部より西方に下った、標高約150mの支陵上に立地しており、全長約23mを測る前方後円墳1基と、径約15m前後の円墳2基で構成される。昭和63年（1988）土砂採取に先立ち、清水町教育委員会が円墳（3号墳）1基を調査した^⑥。調査の結果、3基の埋葬施設を検出し、構築は5世紀末葉と判断された。なお、埋葬施設は舟形および箱形の木棺を埋納した土壇墓であった。主な遺物には、勾玉・管玉・鉄鏃・刀子がある。

竹生古墳群（第4図22） 丹生郡清水町竹生^{たけう}所在。前記杉谷古墳群と同一の三方丘陵から、北西方に伸びる標高約150mの支陵上に立地する。径約18mの円墳2基を含む円墳5基と、一辺約10mの方墳（または方形台状墓）1基で構成される^⑦。

これら古墳群はいずれも、志津川流域の比較的広い沖積地を望み形成されている。また、羽坂

遺跡の立地する未更毛川流域にも、いくつかの古墳群の存在を確認している。

安田古墳群（第4図4） 福井市安田町所在。丹生山地東縁の、標高約10mを測る低丘陵上に立地する。昭和10年（1935）県道の拡幅工事中に遺物が出土し、存在が判明した。円墳2基以上が存在したものと思えるが、詳細は不明である。残された遺物から、古墳時代後期の構築と考えられている^⑧。

羽坂古墳群（第4図6） 福井市羽坂町所在。丹生山地東縁の、標高約50mを測る丘陵上に立地する。径約10mの円墳6基で構成される。

本堂古墳（第4図9） 福井市本堂町所在。未更毛川左岸に形成された河岸段丘背後の、標高約50mの山麓に立地する。径約15mの円墳1基で構成される。

奈良時代および平安時代の遺跡は、7遺跡を確認している。このうち、羽坂前田遺跡（第4図7）・安田上田遺跡（第4図5）・本堂平山遺跡（第4図11）・細坂遺跡（第4図12）・安田長田遺跡（第4図13）は、未更毛川流域に形成された沖積地、およびこれに接続する小谷内に立地する遺跡であるが、遺物の散布地としての把握に止まり、その内容・性格については詳かではない。これに対し、日野川右岸の沖積平野中に立地する遺跡として、東大寺領道守荘遺跡などがある。

東大寺領道守荘遺跡（第4図27） 福井市東下野町・西下野町・久喜津町・運動公園町・福新町・若杉町・加茂河原町・福町・淵町・下江守町所在。日野川と旧足羽川の合流点南方の沖積地に成立した、東大寺領の初期荘園遺跡である。766年（天平神護2）作成と伝えられ、正倉院に残される「越前国足羽郡道守村開田地図」により、荘園の位置などを把握し得る。昭和37年（1962）運動公園建設に伴い発掘調査を実施して以来、数次に亘る発掘調査を実施しているが、未だ明確な遺構検出には至らない^⑨。なお、本遺跡内に位置する久喜津遺跡（第4図25）からは、古墳時代以降の遺物若干が採集されている。

鎌倉時代以降の遺跡には、山麓部に立地する館跡と丘陵上に立地する城跡がある。このうち館跡は2遺跡を確認している。

大瀬仙光坊館（第4図3） 福井市下市町所在。日野川左岸、丹生山地東麓に立地する。朝倉孝景の臣、大瀬仙光坊の居館とされるが、現在は地名にそのなごりを残すに止まり、詳細は不明である。

三留屋敷（第4図19） 丹生郡清水町三留所在。志津川右岸、独立丘陵である三方丘陵の西麓に立地する。朝倉孝景の孫、景冬の館と伝えられ、通称御城垣内^{おしろがいのち}と言われる。

これに対し山城は、5遺跡を確認している。

安居城（第4図2） 福井市金屋町所在。丹生山地東縁の、標高約20mを測る低丘陵上に立地する。眼下には日野川と旧足羽川の合流点を望む。「越前国城跡考」・「太平記」にも記載され、南北朝期には斯波氏の臣細川出羽守が、戦国期には朝倉景健がそれぞれ居城した。

足高山城（第4図15） 福井市安田町、丹生郡清水町清水所在。丹生山地より西方へ樹枝状に

伸びる。通称足高山山頂に立地する。本山城西方に位置する、^{やりがみやま}鎗嚙山城の出城と思える。

鎗嚙山城（第4図16） 福井市安田町、丹生郡清水町清水所在。前述足高山城と同一の丘陵上に位置し、標高約116mの通称城山山頂に立地する。朝倉氏家臣の村野源五郎兼光の子孫が、代々居城としたと伝えられる。5基の郭とこれをつなぐ土橋が良好に遺存している。

^{かみてが}**上天下城**（第4図17） 福井市末町、清水町上天下所在。丹生山地東縁の、標高約100mを測る丘陵上に立地する。

三留城（第4図20） 丹生郡清水町三留所在。独立丘の三方丘陵に西縁し、前記三留屋敷背後の標高約60mを測る、通称五位山^{ごい}山山頂に立地する。三留屋敷と一対となり、朝倉景冬の居城と伝えられる。

以上が、福井平野西縁の地域で確認する、主要遺跡の概要である。同地域の遺跡は、既往の調査例に乏しく、その詳細な内容の把握は今後を俟ちたい。

注

- ① 羽坂遺跡の出土遺物は、現在福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで、報告書刊行のための遺物整理作業中である。また、これとは別に、福井市教育委員会が本遺跡周辺で水路掘削に伴う立会調査を実施しており、縄文時代後・晩期の遺構・遺物を検出している。
- ② 『清水町史』 上巻 1978 清水町 に遺物実測図等の一部が掲載される。
- ③ 沼 弘 「福井市下山遺跡発掘調査報告」『考古福井第1号』 1968 福井考古学研究会
- ④ 注⑥文献に、古墳群の分布図および基数・墳形・規模の一覧表が掲載されている。
- ⑤ 注④に同じ
- ⑥ 青木豊昭ほか 『杉谷古墳群』 清水町埋蔵文化財調査報告第2集 1989 清水町教育委員会
- ⑦ 注④に同じ
- ⑧ 『福井市史 資料編1 考古』 1990 福井市 に遺物実測図等の掲載がある。
- ⑨ 運動公園建設に伴う発掘調査の概要は、『福井県史 資料編13 考古』 1986 福井県 に記載される。また、昭和58年（1983）から実施された、社北地区・社南地区区画整理事業に伴う発掘調査の概要は、注⑧文献に要約して記載される。

伸びる。通称足高山山頂に立地する。本山城西方に位置する、^{やりがみやま}鎗嚙山城の出城と思える。

鎗嚙山城（第4図16） 福井市安田町、丹生郡清水町清水所在。前述足高山城と同一の丘陵上に位置し、標高約116mの通称城山山頂に立地する。朝倉氏家臣の村野源五郎兼光の子孫が、代々居城としたと伝えられる。5基の郭とこれをつなぐ土橋が良好に遺存している。

^{かみてが}**上天下城**（第4図17） 福井市末町、清水町上天下所在。丹生山地東縁の、標高約100mを測る丘陵上に立地する。

三留城（第4図20） 丹生郡清水町三留所在。独立丘の三方丘陵に西縁し、前記三留屋敷背後の標高約60mを測る、通称五位山^{ごい}山山頂に立地する。三留屋敷と一対となり、朝倉景冬の居城と伝えられる。

以上が、福井平野西縁の地域で確認する、主要遺跡の概要である。同地域の遺跡は、既往の調査例に乏しく、その詳細な内容の把握は今後を俟ちたい。

注

- ① 羽坂遺跡の出土遺物は、現在福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで、報告書刊行のための遺物整理作業中である。また、これとは別に、福井市教育委員会が本遺跡周辺で水路掘削に伴う立会調査を実施しており、縄文時代後・晩期の遺構・遺物を検出している。
- ② 『清水町史』 上巻 1978 清水町 に遺物実測図等の一部が掲載される。
- ③ 沼 弘 「福井市下山遺跡発掘調査報告」『考古福井第1号』 1968 福井考古学研究会
- ④ 注⑥文献に、古墳群の分布図および基数・墳形・規模の一覧表が掲載されている。
- ⑤ 注④に同じ
- ⑥ 青木豊昭ほか 『杉谷古墳群』 清水町埋蔵文化財調査報告第2集 1989 清水町教育委員会
- ⑦ 注④に同じ
- ⑧ 『福井市史 資料編1 考古』 1990 福井市 に遺物実測図等の掲載がある。
- ⑨ 運動公園建設に伴う発掘調査の概要は、『福井県史 資料編13 考古』 1986 福井県 に記載される。また、昭和58年（1983）から実施された、社北地区・社南地区区画整理事業に伴う発掘調査の概要は、注⑧文献に要約して記載される。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

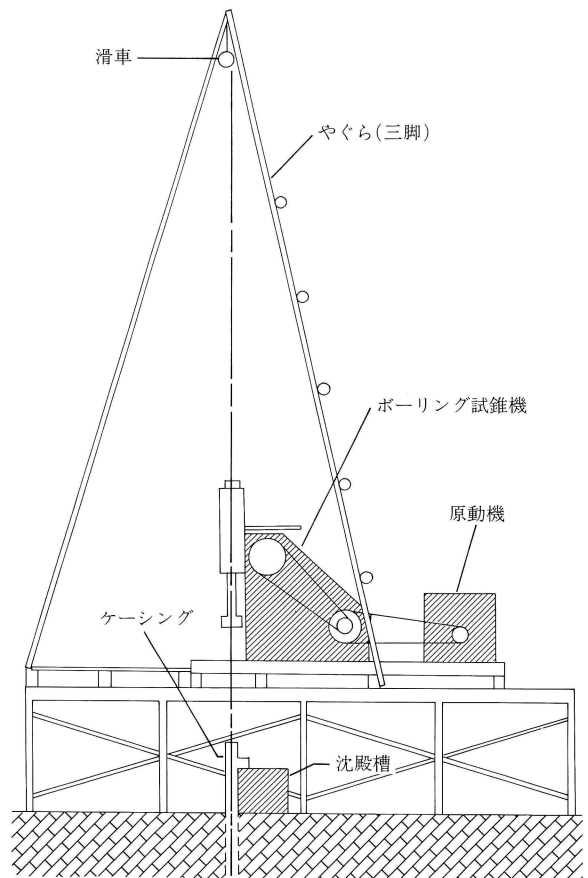
北堀貝塚の範囲確認調査は、貝層や遺物包含層の遺存する位置や深度が不明な事もあり、通常実施する人力による試掘調査は行い得ない状況にあった。このため範囲確認調査では、ボーリング試錐機を使用した土壌コア採集により、大まかな貝層および遺物包含層の範囲・深度を把握する事を調査の第1段階とし、その結果を基として人力による試掘調査を加え、貝層および遺物包含層の遺存状況を把握する事とした。

ボーリング調査は委託事業として、第3年次調査を除く各年次で実施した。調査では、貝層および遺物包含層の深度や層序の状況を把握する必要から、土壌の採集を空白なく連続的に行う連続コア採集とした。また、ボーリング調査中に土壌採集管内での攪乱を極力防ぐため、無水工法で実施する事とした。土壌採集の方法は、第5図に示したボーリング試錐機により、土壌採集管を打ち込み土壌を採集する方式であり、1回の打ち込みで1mの土壌採集が可能であった。更に、採集した土壌から土層を観察する必要から、土壌採集管の口径を可能な限り大口径とし、口径80mmの採集管を使用した。

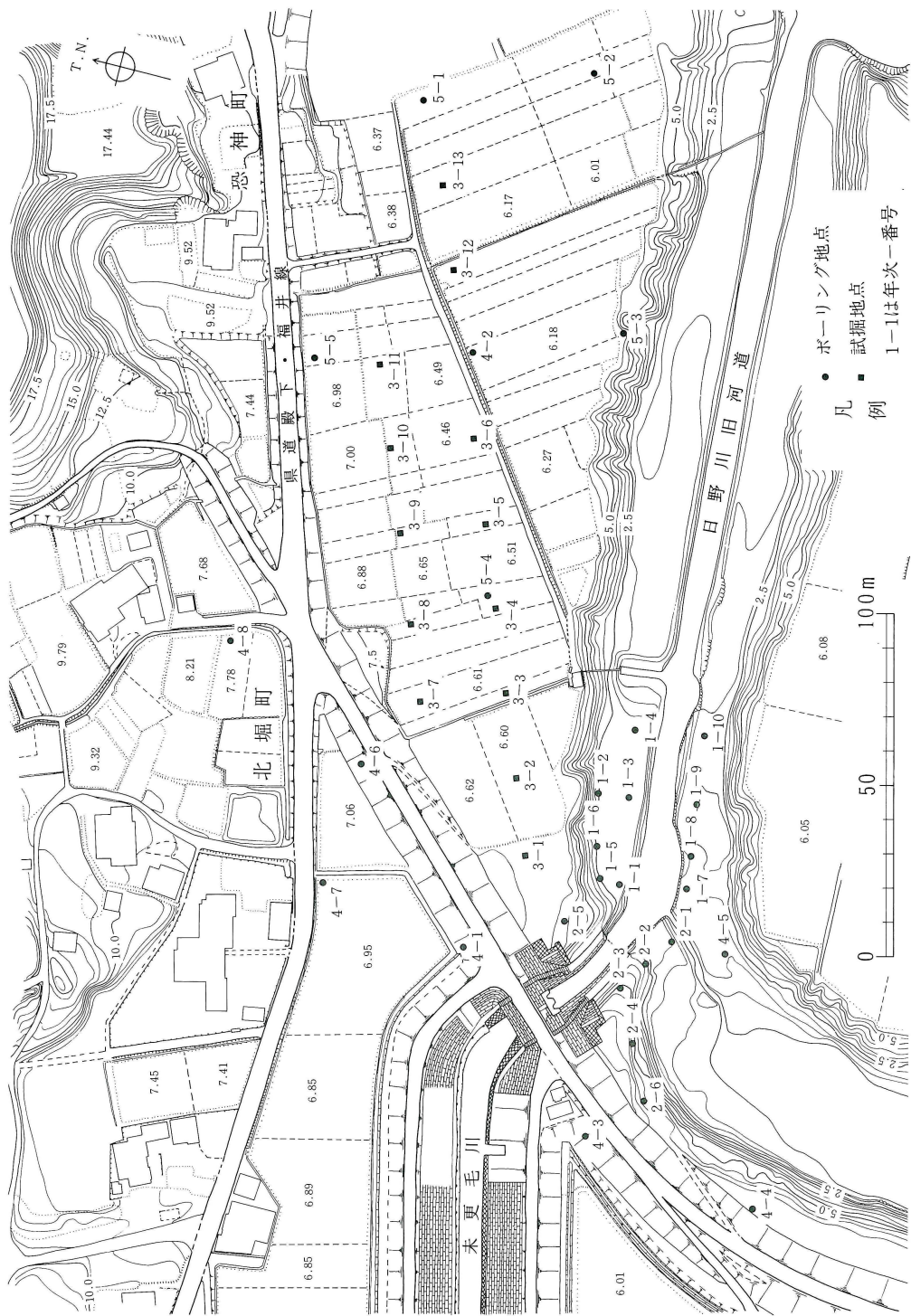
採集した土壌コアは、木製のコアケースに入れる事としたが、乾燥を防ぐため市販のラップで包み密封した。

採集後のボーリングコアは、土層の観察を行った後、層位ごとに分けて簡易のウォーター・フローテーションにかけた。この際使用したザルの網目は、1mmと0.5mmのものを使用した。この作業により取り出した遺物は、乾燥させた後、骨類・貝類・種子類・木片類などの自然遺物や土器などの人工遺物を肉眼により抽出した。

なお、人力による試掘調査を第3年次調査で実施したが、遺物包含層の遺存深度が深層であり、土砂の崩落の危険もあることから、以後の実施を見送った。



第5図 ボーリング試錐機構造図



第6図 試験調査地点図 (縮尺1/2,000)

第2節 調査の成果

北堀貝塚の範囲確認調査は、ボーリング調査により大略な遺跡の範囲を把握した後、人力掘削による試掘調査を実施し、遺跡の遺存状況等を把握する計画を組んだ。しかし、遺跡の遺存する層位が極めて深所に存在するため、人力掘削による試掘調査実施を諦め、ボーリング調査による範囲確定作業を主に行う事に計画変更した。本節では、ボーリング調査により判明した、土層の堆積状況を主に記述することとしたい。

A 地形概況

北堀貝塚の立地する地形の大略な把握は、第2章第1節において既に行った。ここでは、調査開始に当たって想定した、やや微視的な遺跡の立地地形について記しておきたい。

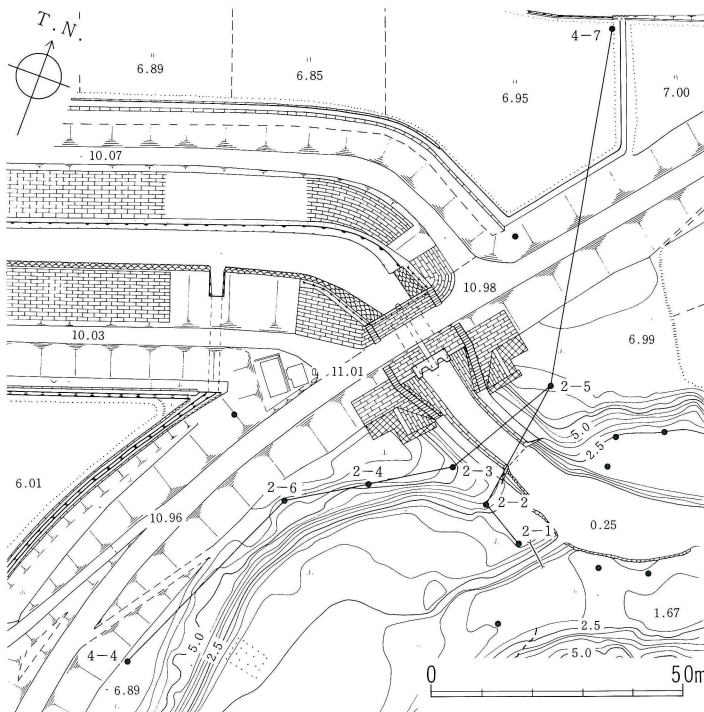
北堀貝塚が所在する地点は、未更毛川と日野川の合流点付近とされ、現況では丹生山地東麓から約150m程離れた、沖積平野内に位置している（第6図）。調査前の踏査では、未更毛川の水閘周辺の土層断面観察から、同所に洪積層と思える硬質の黄褐色粘質土層が堆積する事を確認しており、貝層の遺存する層位はこの黄褐色粘質土層より上層であろうと推定した。また、この基盤層と思える黄褐色粘質土層が、沖積平野中に孤立して存在するとは考えにくく、丹生山地東麓より派生する低丘陵が、埋没地形として本貝塚周辺に存在するものと推定した。これらの事から北堀貝塚は、丹生山地東麓より東方に伸びる低丘陵先端に立地・展開した、貝塚を伴う集落遺跡と想定し調査を開始する事とした。

B 土層

今回実施したボーリング調査の地点数は、総数29地点であり、広大な遺跡を被う土層の堆積状況を詳細に把握するには、余りに少ない資料である。また、ボーリング調査で得た各地点の土層堆積状況は、局所的な状況を示す場合もあり、これを統合し遺跡全体の土層堆積状況に持ち上げるには困難が多い。この様な状況から、ここで説明する土層の堆積状況は、大略な把握とならざるを得ない。以下、貝塚部分および集落部分の順に説明を加えることとしたい。

イ. 貝塚部分の土層堆積状況

今回のボーリング調査で貝層を検出した地点には4地点があり、このうち3地点の土層柱状図を提示することとする。第8図上半は、貝層を検出した2-3, 2-4, 2-6番孔を含む、遺跡南西端相当部分の土層柱状図である。貝層は、北東から南西に向って傾斜する暗青灰色粘質土層上に、遺物を包含する黒灰色および暗灰色粘質土を伴い堆積している。貝層は、黒色粘質土を若干混じった混土貝層であり、貝の多くは破細していた。貝層の堆積は、傾斜変換点となる2-4番孔で最も厚く、1.25mを測る。更に、貝層上下の暗灰色・黒灰色粘質土を含めた遺物包含層の層厚は、1.75mを測る。また、2-6番孔では貝層が暗青灰色粘質土を挟み3層に分かれており、貝塚末端部の堆積状況を示すものと思える。なお、4-4番孔の土層堆積から判断すれば、同地点は遺跡の範囲外となろう。これに対し、貝層検出地点とは現未更毛川の対岸となる2-5番孔



第7図 貝塚部土層断面作成地点図(縮尺1/1,500)

この茶褐色粘質土および黄褐色粘質土の堆積は、4-7番孔および試掘調査を実施した3-1番地点でも確認しており、4-7番孔から2-5番孔へ向う安定した地形が存在しているものと考ええる。すなわち本貝塚は、この北方より南方に伸びる安定地形の先端に形成されているものと考ええる。

ロ. 遺跡南縁および東縁部の土層堆積状況

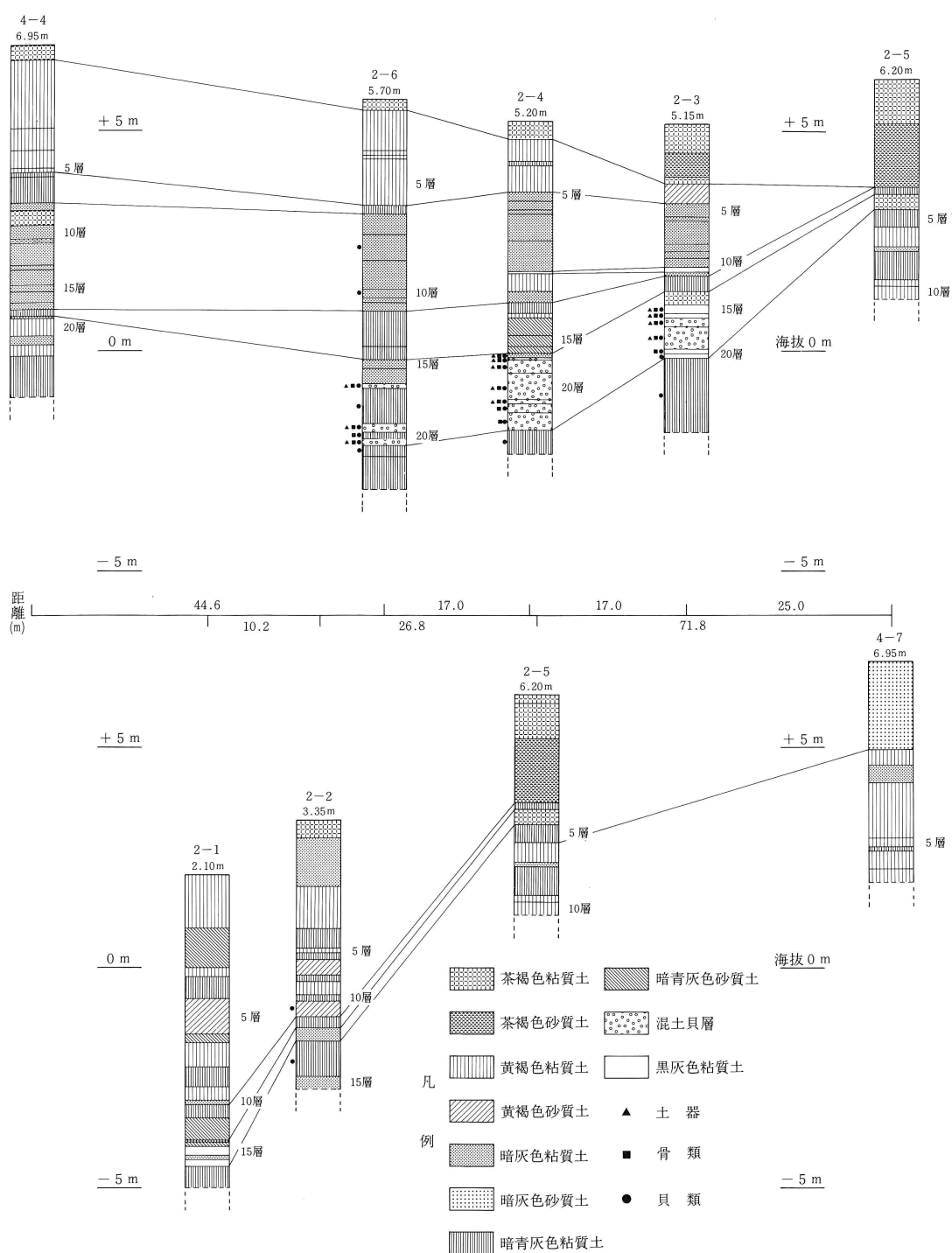
遺跡南縁および東縁部の調査は、第1次・第4次・第5次で実施した15本余のボーリング調査と、第3次調査で実施した13ヶ所の人力掘削による試掘調査がある(第6・9図)。

第10図上半に示す土層柱状図は、集落推定部分に相当する4-7番孔から4-2番孔へ向かう土層の堆積状況である。このうち4-2番孔では、標高0mを前後する深度で、人工・自然の遺物を含む、層厚約3mの遺物包含層(第12~22層)を検出した。また、4-6番孔では標高約4mの深度で、若干の自然遺物を包含する黒灰色粘質土層(第11層)を検出した。

これら遺物包含層は、前述した貝塚部の土層堆積状況とほぼ同様に、包含層の上下を暗青灰色粘質土(又は黄褐色粘質土)に挟まれて堆積している。特に4-2番孔における遺物の出土深度は、貝塚部分で末端付近と判断した2-6番孔の深度に近く、遺跡東端部の状況を示しているものと思える。また、4-6番孔では第4・5・11層から遺物が出土したが、このうち第5層から出土した土器片は弥生時代以降の品と思え、現状では第11層を縄文時代の包含層と判断したい。更に5-4番孔では遺物の出土は無かったものの、第10~15層間に堆積する土層が、遺物包含層

では、第6層以下に安定した地山層と思える、黄褐色粘質土を基調とする土層の堆積を確認した。貝層検出各地点の標高の変化から考えれば、2-5番孔で確認した安定地盤の高まりに、貝の投棄点を求める事ができよう。また、各貝層の上下に共通して堆積する、暗青灰色粘質土および砂質土は、2-5番孔の第3層および第5層に各々対比されるものであろう。この事から判断すれば、貝の投棄点は標高3.20~3.55mに堆積する、第4層とした茶褐色粘質土層中に求める事ができよう。更に、

第2節 調査の成果



第8図 土層柱状断面図(1)

に対応すべきものと思える。

第10図下半の2-5番孔から1-9番孔へ向う土層柱状図は、遺跡南縁部の土層堆積状況を示すものである。このうち1-9番孔では、第8・12層で貝類細片の出土を見たものの、第16層以上の土層は攪乱層（河川再堆積層を含む）と判断出来、大正2年以降に実施された河川浚渫工事区域に当るものと思える。また、1-6番孔では、崖裾線付近でのボーリング調査のため、現地地表下約1.8mと浅い地点で、遺物包含層と思える層厚約1mの黒灰色粘質土の堆積を確認した。同層の検出深度及び層厚は、貝塚部分の2-3番孔の状況に近く、前述した1-9番孔との間には、貝層を含む遺物包含層が、かなり高い確率で遺存していたものと推測させる。

ハ．集落推定部分の土層

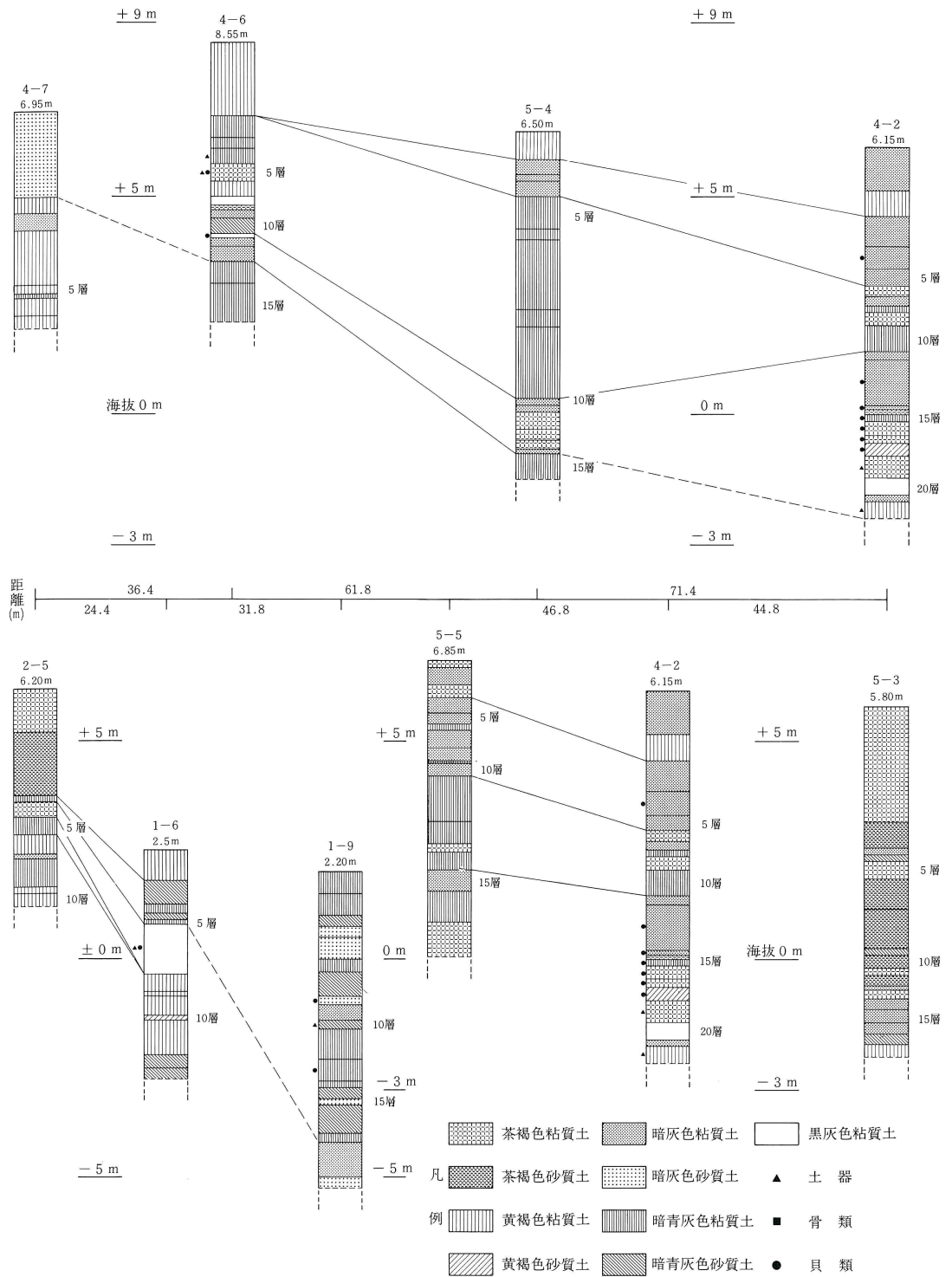
これまでに記述してきた遺跡各部分の土層堆積状況は、大略に言えば4-7番孔と2-5番孔を結ぶ線上から、各方向に斜面堆積した状況を示すものと思える。また、この区域には安定した地山層と思える黄褐色粘質土を基本とする土層の高まりを確認しており、現状ではこの区域をもって、北堀貝塚形成に係る集落の立地区域と考えておきたい。

黄褐色粘質土を確認した地点には、1-6、2-5、4-1、4-2、4-7、5-3の各孔



第9図 遺跡東縁・南縁部土層断面作成地点図（縮尺1/1,500）

第2節 調査の成果



第10図 土層柱状断面図(2)

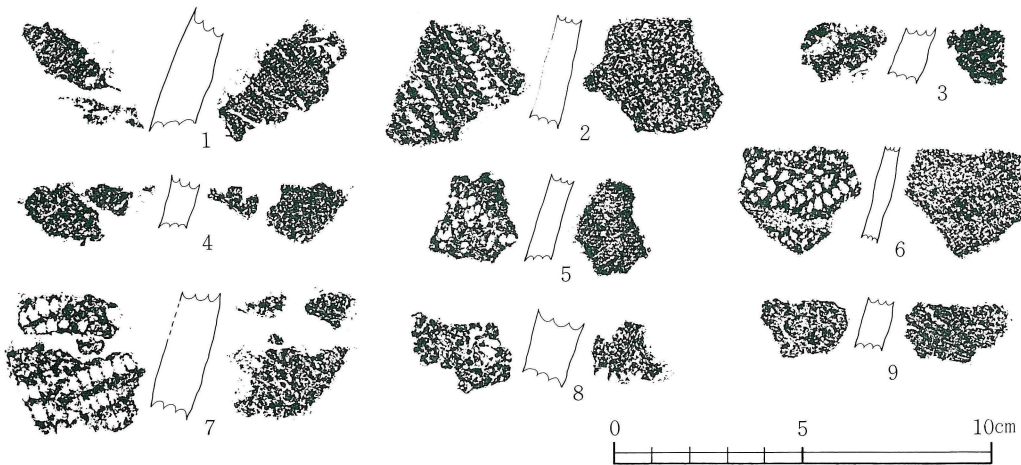
があるほか、3-1, 3-2番地点(第6・8・10図)がある。このうち、2-5, 4-1, 4-7番孔および3-1, 3-2番地点では、標高3~5.5mの深度で黄褐色粘質土層を検出した。第8図下半の4-7から2-5番孔へ向う土層柱状図は、同所の土層堆積状況を示すものであるが、4-7番孔第1層は未更毛川の堆積土及び表土であり、第2層とした黄褐色粘質土層の上部を侵食し堆積したものと思える。

C 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器を主とする人工遺物と、貝類・骨類を主とする自然遺物がある。ここではこのうち人工遺物について説明することとし、自然遺物の記述は後論に委ねたい。

今回の調査はボーリング調査が主体であるため、人工遺物と判定出来る例は土器に限られ、石器・骨角器などの出土はなかった。土器片もボーリングの口径から小片に止まり、かつ点数も不明確な品を含めても40点に満たない。第11図に示した土器は、出土土器のうち主たる品の実測図である。出土土器は胎土に混入する繊維の有無により大きく2つに分けられる。2・5・6は胎土中に繊維の混入が無い品である。繊維を混入する品に比べ器厚はやや薄い。器外面に施される縄文は節のやや細かい例が多く、内面に施すものは無い。なお、5は内面に弱い条痕を残す。1・3・4・7~9は胎土に繊維を混入する品であり、器厚は全体に厚い。器面に施される縄文は、節の粗い例が多く、3・4・7・8は内外両面に縄文を施している。また、9は内面に弱い条痕を残す。

これら土器のうち、5~8は2-3番孔で上下層に分層した15層の黒灰色粘質土層と17層の混土貝層から出土しており、繊維混入の有無が層位的には先後の関係として把握出来た。



第11図 出土土器実測図(縮尺1/2) 1. 1-6番孔 6層 2. 1-10番孔 15層 3. 2-3番孔 攪乱層
4. 2-3番孔 表採 5・6. 2-3番孔 15層 7・8. 2-3番孔 18層 9. 2-6番孔 17層

第4章 ま と め

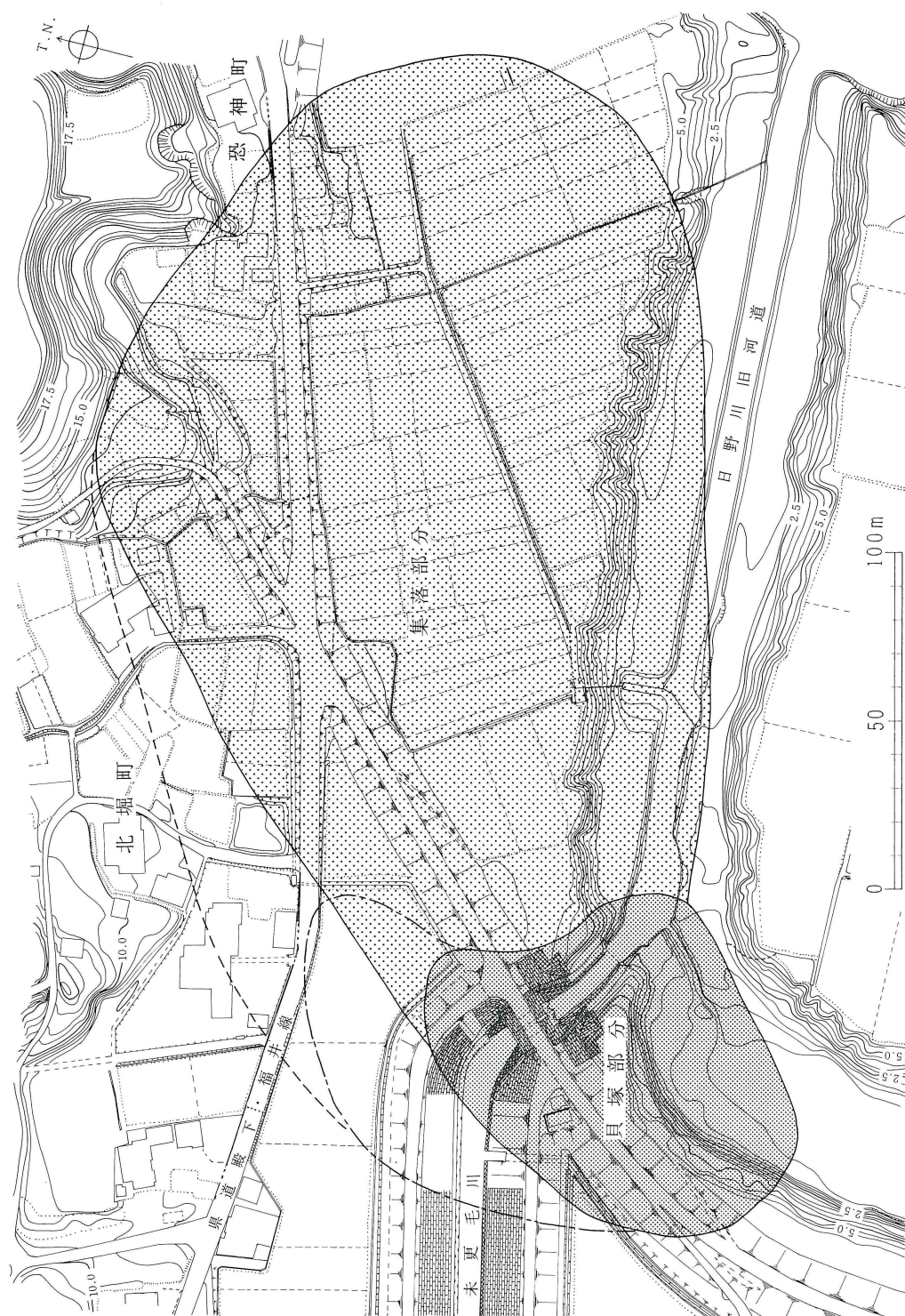
北堀貝塚の範囲確認のための試掘調査は、貝塚の遺存状況およびその分布範囲を確定させる事を主眼としたが、貝塚と隣接したであろう生活の場としての集落部分の遺存状況および範囲の把握も調査目的に加えた。試掘調査では、貝層および遺物包含層の遺存する位置が深所に存在するため、人力による調査を加える事は出来なかったが、ボーリングによる試掘調査では、貝層および遺物包含層の遺存状況・分布範囲をある程度把握する事が出来、当初の目的は一応達成したものであると思う。

第12図は、今回の試掘調査結果から判断した北堀貝塚の範囲図である。このうち集落部分は約37,000㎡を計るが、その東半部分は集落が立地する微高地東斜面および日野川の河道部分に相当するであろう事は、貝層を含めた土層の堆積状況から判断出来る。このうち微高地の標高は+4～5mを測り、微高地周辺の低地帯（旧河道）との標高差は最大で7mを測る。今回のボーリング調査では、この微高地上に展開する集落の痕跡は確認し得なかったものの、微高地周縁の遺物包含層の堆積状況は、同所からの斜面堆積を示すと判断出来る。貝塚が集落の縁辺に形成されるとの前提に立てば、この微高地上に集落の立地を求める事が妥当と思える。なお、集落の東端は更に拡大する可能性を残す。

集落部分の南西端に位置する貝塚部分の面積は、約8,000㎡を測る。貝塚は標高-2m～+1mの間に形成されており、一部河川により削平を受けるものの遺存状況は良好である。貝層の形成時期については、早期から前期に亘るという理解と、早期のみに限られるという理解があった。今回実施したボーリング調査では、貝層中より出土した土器の大半を繊維土器が占めた。また、2-3番孔では前期の所産と思える薄手・無文土器が、貝層の上層を覆う黒灰色粘質土層から出土した。これらの点から、未更毛川右岸における貝層の形成は、早期末葉かと思える。

この様に、早期末葉に貝塚形成を見、前期まで継続的に展開する北堀貝塚は、日本海岸の貝塚としては極めて大規模な例の一つと思える。本遺跡が県史跡に指定されている事は妥当な判断であり、今後は貝塚を伴う低湿地性の集落遺跡として、再指定・追加指定の検討が必要であろう。

追記 範囲確認調査終了後、県道殿下・福井線の改良工事が、未更毛川左岸で計画された。北堀貝塚の一部が計画路線内に含まれる事から、再度ボーリング調査を実施する事となった。調査の結果、貝塚部分および集落部分の範囲が、更に西方に拡大する事が判明した。第12図に示す破線・一点破線は、拡大した集落部分および貝塚部分を示す。なお、改良工事は工法変更による仮設工事とし、遺跡を現状保存した。なお、道路改良工事に伴うボーリング調査結果の報告は、他日行いたい。



第12図 北堀貝塚範囲図 (縮尺1/2,000)

付編 1 福井県北堀貝塚出土の動物遺体

金子 浩 昌

はじめに

本資料は福井県下においてほとんど唯一の貝塚として知られている北堀貝塚から出土した貝類、魚・鳥・獣類の遺骸である。本貝塚についての詳細は別項に詳しく述べられているのでそれを参照されたいが、現在は水田下に埋没し、その様相を地表からみることはできない。かつて、水田の水門の建設工事の際に多くの貝殻と土器その他の遺物が検出され、その存在が知られたが、それも既に半世紀にもなる以前のことである。今回福井県埋蔵文化財調査センターによって、この貝塚のボーリング探査が行われ、貝塚の規模が詳細に知られるに至った。それによると貝塚はこれまで想像していたよりもはるかに大きく、貝層中には魚・鳥・獣類の遺骸も含まれ、しかもこうした骨がかなりの量含まれていることも明らかになったのである。貝塚の所属年代は早期末葉期を主にするものである。今回報告する資料は上述したボーリング探査によって得られたものでごく僅かであるが、貝塚の性格をよく示す貴重なものであると考えている。

報告に当たり大変お世話になった福井県埋蔵文化財調査センターの工藤俊樹氏、並びに金津町教育委員会社会教育課の木下哲夫氏に御礼申しあげたい。

I 北堀貝塚出土の動物遺体

北堀貝塚出土の動物遺体種名表

1. 軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class GASTROPODA

中腹足目 Order Mesogastropoda

ムシオイガイ科 Family Alycaeidae

ムシオイガイ *Chamalycæus nipponensis*

ゴマガイ科 Family Diplommatinidae

ゴマガイ *Diplommatina uzenensis*

有はい亜綱 Subclass PULMONATA

柄眼目 Order Stylommatophora

中輸尿管亜目 Suborder Mesurethra

キセルガイ科 Family Clausiliidae

属・種不明 Gen.et.sp.indet.

曲輸尿管亜目 Suborder Sigmurethra

コハクガイ科 Family Zonitidae

付編1 福井県北堀貝塚出土の動物遺体

ヒメコハクガイの一種 *Hawaiiia* sp.

ベッコウマイマイ科 Family Helicarionidae

ヒメベッコウ属の一種 *Discoconulus* sp.

オナジマイマイ科 Family Bradybaenidae

属・種不明 *Discoconulus* sp.

斧足綱 Class PELECYPODA

いとえら(糸鰓)亜綱 Subclass FILIBRANCHIA

真多歯目 Order Eutaxodonta

イタボガキ科 Family Ostreidae

マガキ? *Crassostrea gigas*?

ほんえら(弁鰓)亜綱 Subclass EULAMELLIBRANCHIA

異歯目 Order Palaeoheterodonta

シジミガイ科 Family Corbiculidae

ヤマトシジミ *Corbicula Japonica*

2. 脊椎動物亜門 Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱 Class CHONDRICHTHYES

エイ目 Order Rajiformes

科・属不明 Fam.et.ge.indet.

硬骨魚綱 Class OSTEICHTHYES

ニシン目 Order Clupeiformes

科・属不明 Fam.et.ge.indet.

サケ目 Order Salmoniformes

サケ属の一種 *Oncorhynchus* sp.

コイ目 Order Cypriniformes

コイ科 Family Cyprinidae

ウグイ *Tribolodon hakonensis*

コイ *Cyprinus carpio*

フナ *Carassius auratus*

スズキ目 Order Perciformes

タイ科 Family Sparidae

マダイ? *Pagrus major*?

鳥綱 Class AVES

破片のみ fragment only.

哺乳綱 Class MAMMALIA

食肉目 Order Carnivora

イヌ科 Family Canidae

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

偶蹄目 Order Artiodactyla

イノシシ科 Family Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

以上今回の北堀貝塚のボーリング調査によって、貝類8種のうち陸産貝類6種、魚類8種、哺乳類で1種が知られた。通常のボーリング調査によって、魚・獣などの動物質資料が採取されることは稀で、埋没する遺物包含層にこの種の標本が、かなりの量含まれているであろうことが推測されるのである。

II 出土した動物遺体について

1. 貝類

ムシオイガイ *Chamalycaeus nipponensis*

ゴマガイ *Diplommatina uzenensis*

ヒメコハクガイの一種 *Hawaiiia* sp.

ヒメベッコウ属の一種 *Discoconulus* sp.

いずれも陸産貝類の微小マイマイ類である。貝殻が脆く、今回のようなボーリング調査の資料中に発見されることは予想していなかった標本である。ムシオイガイは山間の砂礫地に多いとされ、ゴマガイも山地性で他は平地の灌木林やその落ち葉、枯れ草の下などに生息する。ヒメコハクガイの一種は平地性で灌木の根元、落葉下にすみベッコウマイマイ属もいっしょに出土することが多い。これらの陸産貝は本州各地の縄文時代貝塚の貝層においてしばしば検出される種類である。貝塚の周辺にはこうした貝類が生息するような樹林があり、枯れ葉が覆うような状況があったのであろう。

ヤマトシジミ *Corbicula japonica*

多くの標本が得られている。本貝塚がこの種の貝類を主体とすることは既に知られていたことであるが、これも予想どおりに本種を多数包含する貝層が広がっていることが確認されたのである。貝塚の形成された当時、この周辺の低地帯は広い汽水域が展開し、ヤマトシジミの生息に良好な環境があったものと思われる。

殻長35.0mm位になるのが大型のもので、数は少ない。25.0mm前後の殻が普通である。これも縄文時代貝塚のヤマトシジミにみる一般的な大きさである。

2. 魚類

エイ目 Order Rajiformes

尾棘の破片が1点検出されているだけであるが、この遺物は単なる食料残滓というよりも、道具として使われたものの一部ではなかったろうか。エイ類の尾棘は鋭く、刺突具としてしばしば使われるのである。刺突具として利用された場合、棘の部分は特別の加工をしないことが多いので顕著な使用痕がみられない限り、製品であったかどうかを確認することが難しくなる。本標本もそのようなものの一つではないかと考えている。

ニシン目 Order Clupeiformes

イワシ類の椎体が多く検出されている。ボーリング調査での限られた資料であるために、種名については明らかでない。本州の縄文時代貝塚からはニシン目の出土は多く、マイワシが目立つ。

サケ属の一種 *Oncorhynchus* sp.

断片的な標本が得られているのみである。日本海側を回遊南下するサケ類はこの福井県辺りまでは現在でも多い。おそらく石器時代にはかなりの個体が川を遡るために湾内に進入したものと思われる。しかし、河口部でそれをどの程度漁獲できたかは問題のあるところで、遺跡からこの魚の遺骸がどのように出土するか確かめる必要がある。サケの回遊遡河地方でも遺跡の地理的な位置によってこの魚の遺骸の出土はかなり変わってくるからである。

以上は大型のサケ類についてであるが、別に小型のマス、アユ位の大きさの椎体も出土している。椎体長は1.8mm位である。この標本も貝層中にはかなり含まれるのであろう。

コイ *Cyprinus carpio*, フナ *Carassius auratus*

コイ・フナの遺骸は骨体部から遊離した咽頭骨の歯がある。最大の咽頭歯幅8.5mmの標本があるが、その大きさから体長40cm位にはなる個体であることが推定される。石器時代のフナにはコイと同じ位の大きさになる遺骸の出土することも珍しくない。本貝塚の例もそうした個体を含むものであったのであろう。このようなコイ、フナがおそらくこの貝塚の主體的な魚種であったと思われる。

ウグイ *Tribolodon hakonensis*

歯骨、咽頭骨の破片が出土している。本種の咽頭骨の出土をみるとコイ、フナなどとほぼ同じ程度にみることができる。おそらく漁獲される割合も同じ位であったのではないかとと思われる。

マダイ *Pagrus major*

マダイの骨としては歯骨の断片が唯一知られるのみである。咽頭骨の歯のように小さな断片でもその種類を同定できる標本もあるが、タイの場合にはそのような部位は残されていないかった。

3. 哺乳類

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

臼歯M₁の破片であるが1点出土していて、この種の遺骸の少なくないことを示している。標

本は臼歯後丘部分のみの破片。幅5.7mm。

イノシシ *Sus scrofa*

臼歯の小断片を検出したのみである。大形獣類の遺骸のごく一部のみで、種名を判定しようとするれば、臼歯の断片はもっとも確実な資料であろう。

収 束

今回の調査はボーリング調査という限られた範囲で採取された資料であり、またそれ故に資料も断片的であったが、貝塚の性格を知るために必要な資料はかなり採取することができたとみてよいであろう。

貝種については、ヤマトシジミを主体とすることが多くの資料で確認された。その殻の大きさは殻長25.0～30.0mmというのがもっとも多かったのではないと思われる。これに対して鹹水産種の貝種はカキ類の断片を得たのみで他の種類を確認することができなかった。鹹水貝種については、以前からの観察でも同様のことが述べられている。

陸産貝類は断片的で種名の明らかなものがあるが、すべてで8種類あったことが確認されている。それだけ多様な自然のあったことが裏付けされよう。

魚類も淡水系の魚種を中心として主要な魚種は確認されたといってよい。この他に鹹水産魚種も知られ、とくにイワシ類の検出されていることは、この近海が豊かな資源を擁していることを示すものであろう。そして当然のことながらマダイをはじめとする海産魚類も漁獲する機会のあったことを十分に推測できよう。

鳥獣類の遺骸の少ないことはボーリング調査では止むを得ないことであろう。しかし、他の遺跡の例からみても、この時期には多くの鳥獣骨を伴うのが普通である。これまでに出土した資料のなかにイノシシ、タヌキの歯を検出しているし、別にシカの頸椎骨、イヌの犬歯、下顎骨のあったことが既刊の報告の図版にみられる。

日本列島に多数知られる縄文時代の貝塚の分布を大きくみると、太平洋側と日本海側に大別できる。そしてその大部分が太平洋側に分布するという特殊性をもつ。これについて特に注意した先学もあったが、積極的にこの問題にふれることはほとんどなかったといってよい。それは貝塚についての立地論、その遺跡としての特性に関心のもたれることがこれまでに極めて少なかったからである。1965年に筆者は南西諸島を除く日本列島の縄文時代貝塚の地域的な分布と、それぞれの地域の特性についてまとめるところがあった。その中で北堀貝塚を含めた日本海側の貝塚の分布上の問題点を指摘しておいた。それは日本海側における貝塚の形成が、ラグーンと汽水域の発達とに密接な関係があったのに対して、太平洋岸側における貝塚の形成は縄文海進に関わる内湾域の発達に関わるという際立った差異についての指摘であった。この考えは今も変わっていない。しかし、この当時は本貝塚を直接訪れたわけでもなく、貝類などについて実査する機会もなかった。その後日本海側の貝塚を調査する機会がある度にこの問題に触れてきたのであるが、北堀貝

塚がその代表的な貝塚の一つであり、おそらくそうした貝塚のなかではもっとも保存の良好な状況で残されているのではないと思われる。本貝塚の重要性がますます高いものになったといえるのであろう。

参考文献

山内清男(1934)：日本海岸に貝塚の少ない理由、ドルメン3－9

金子浩昌(1965)：貝塚と食糧資源、“日本の考古学Ⅱ”所収、河出書房

金子浩昌他(1982)：狩猟・漁労対象動物の地域性、季刊考古学No.1、雄山閣

金子浩昌(1984)：亀ヶ岡遺跡出土の脊椎動物遺骸とその関連資料について、“市原寿文他、縄文後・晩期における底湿性遺跡の特殊性に関する研究”所収、「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書－」

第1表 貝類（ヤマトシジミ）計測一覧表

地 点	層 位	貝 類							備 考
		ヤ マ ト シ ジ ミ							
		完 存 殻				殻 頂		殻 片	
		大型個数	重量(g)	小型個数	重量(g)	個数	重量(g)	重量(g)	
1－4	9						0.5		
〃	10	1	1.8			6	5.3	5.8	
1－6	6						0.1		
1－7	10						0.0		
〃	11			3	3.7	3	3.2	1.9	
〃	12	1	1.9				0.3		
〃	13						0.5		
〃	16						0.1		
1－9	8					2	0.9	1.8	
〃	12					1	0.1		
1－10	11					3	0.2	0.1	
〃	15						0.0		
2－2	11						0.5		
〃	14					1	0.2	0.4	
2－3	カクラン					179	56.4	75.2	
〃	表採					413	97.5	195.3	
〃	15						5.6		
〃	16			1	0.1	1	0.1	8.7	
〃	17	17	46.7	19	20.0	357	206.9	525.1	
〃	18	34	74.2	50	51.5	1111	558.7	920.7	

地 点	層 位	貝 類							備 考
		ヤ マ ト シ ジ ミ							
		完 存 殻				殻 頂		殻 片	
		大型個数	重量(g)	小型個数	重量(g)	個数	重量(g)	重量(g)	
2－3	21					3	0.2	1.1	
2－4	表採	1	1.7	19	8.6	216	516.7	2256.1	
”	18					7	0.6	56.0	
”	19					153	26.3	265.4	
”	20	91	234.5	68	76	503	406.1	711.0	
”	21	42	95.7	129	132.3	1364	850.3	1206.8	
”	22	10	21.9	7	7.1	242	143.3	482.3	
”	23	16	33.6	17	16.3	264	116.9	309.9	
2－4	24					2	0.6	0.4	
”	25					1	0.1	0.2	
2－6	カクラン					72	34.4	41.4	
”	8							0.0	
”	10							0.0	
”	17	2	3.8	2	1.2	47	9.2	61.7	
”	18					7	0.9	1.5	
”	19	11	29.8	19	19.5	304	206.3	273.1	
”	20	9	24.4	19	14.3	55	38.4	52.5	
”	21	1	5.0	7	6.3	50	25.2	42.4	
”	22					9	1.6	3.3	
4－2	4							0.0	
”	12							0.0	
”	13							0.0	
”	15							0.0	
”	16							0.0	
”	17					3	0.5	1.9	
”	18							0.1	
4－6	5							0.1	
”	11							0.0	
4－8	4							0.1	
”	5							0.1	
5－1	17							0.0	

付編1 福井県北堀貝塚出土の動物遺体

第 2 表 出 土 貝 類 ・ 骨 類 計 測 一 覧 表											(単位 mm)
地点	層位	エイ類	イワシ類	サケ	コイ・コイ科	フナ	ウグイ	その他の魚種	鳥・獣類	貝	類
2-3	15	尾棘片 1	尾椎 1 椎体長 1.53 椎体径 1.45		コイ咽頭骨 3 椎体 10	咽頭骨 3	咽頭骨 3	マダイ? 歯骨片 L.1	イノシシ 臼歯片		
	16		腹椎 1 椎体長 1.35 椎体径 1.64		コイ科 血管間棘 1	歯骨 R.1 尾椎骨 1	咽頭骨 2	種不明 背鱗 1 擬鎖骨 R.1 タイ科 歯 1(焼ける)			
	17		腹椎 4 椎体長 1.27 椎体径 1.75 椎体長 1.60 椎体径 2.81 椎体長 1.96 椎体径 2.07 椎体長 2.10 椎体径 2.02	椎体 2	コイ科 鰭棘 1		咽頭骨 1	種不明 尾椎骨		ヒメコハクガイの一種 2 ベッコウマイマイ属 1	
2-4	18		腹椎 2 椎体長 1.28 椎体径 1.48 椎体長 1.26 椎体径 1.23	椎体 1	コイ背鰭片 4	主鰭蓋骨片 5	咽頭骨 2	種不明 椎骨 18	焼けた鹿角片	ムシオイガイ 2, オナジマイマイ破片 1 スジケシガイ? 1, マガキ破片 キセルガイ科(破片)1 (幼貝) ヒメコハクガイの一種 4, キビガイ科の一種 1 ヒメベッコウ属の一種 1	
	19							鰭棘片			
	表 採			椎体片 3	コイ科 腹椎骨 3 尾椎骨 3 椎体片 4 尾部棒状骨 1	咽頭骨 2					
2-6	18				コイ咽頭骨 1	咽頭骨 1		鰭棘片多数	焼けた獣骨片		
	20			椎体片 3	コイ咽頭骨 1 コイ科 背鰭棘 4	主鰭蓋骨片 6	歯骨 L.1 咽頭骨 2 腹椎骨 1 尾椎骨 6	種不明 背鱗片 5			
	17							種不明 椎体片 1 椎体径 8.71	破片		
2-6	19							種不明 椎骨片 1 椎体長 8.98 椎体幅 11.0			
	20							種不明 背鱗片			

付編 2 北堀貝塚採集の縄文土器について

木 下 哲 夫

1 略史

北堀貝塚の発見とこれを取り巻く状況については、本冊「第1章調査の経過 第1節遺跡の来歴」に記載したとおり、正式な発掘調査報告書の類は見当たらない。上田の調査は現地踏査に止まり、「夏期最減水期に於てのみ其状態を観察し得るに過ぎない。故に調査は未だ十分なりと云い難く、況んや遺物包含の層位的状態の如きは他日の調査に俟たねばならない」（上田1933）状況であって、浜田耕作、藤岡謙二郎、印牧邦雄、斉藤与次兵衛、斉藤優、沼弘等が実施したとされる調査も、折々断片的に触れられるのみでその詳細については不明と言わざるを得ない。

（上田1917）では土器に対する記述は見られず、現状では（上田1920）・（上田1933）に掲載された土器が貝殻、石斧と共に積み上げて撮影された一葉の写真から、往時の出土状態を偲ぶしかない。（上田1918）には二葉の土器のスケッチが掲載され、それらを含んで撮影された一葉の同一写真が（上田1920）・（上田1933）にもある。そのうち石器については、「一個は今丹生郡安居小学校に保管」（上田1917）、「現今福井高等女学校に蔵し」（上田1918）との記録が有ものの、その他の土器等は既に散逸したと思われ、当時出土した資料のなかで現存するのは、当時浜田耕作が採集した（横山・佐原1960）とされる土器破片3個しかないであろう。

その外現認出来る資料としては、福井市安居公民館、福井市郷土歴史博物館に藏品が在り、これらは昭和40年（1965）に実施されたサンドポンプによる浚渫工事の際出土した遺物を、地元住民が採集・保存したものであるという。福井市郷土歴史博物館藏品の来歴には、「末定近（福井市北堀町）採集」（沼1969）と記載されている。

また、福井県立三国高等学校郷土資料室藏品の中に、北堀貝塚出土と伝られるものがある。これについては、類推すれば藤岡謙二郎が調査した際、獲得した遺物の一部であろうか。近年『福井県史 資料編13考古』、『福井市史 資料編1 考古』刊行の際、「保存状態や出土した遺物の分散化、あるいは散逸状態が目立ってきており」（南1986）との危惧から現存する資料の集成が計られ、新たに長谷川陽子採集資料（南1990）も追加されている。

発見当初上田は、「其手法は多少精粗の差はあるが河内國府の遺蹟地から出土した土器に彷彿たるものがある」とことと、「土器の底部は尖りて彌生式土器と異なる所はない」（上田1918）状況を勘案し、縄文土器と弥生式土器の混在を主張したが、後には「然し紋様はすべて縄紋式土器に属するもので薄手に属するものと認められる」（上田1933）との見解を示している。その後、藤岡謙二郎が実施した調査の折の見聞にも、「多数の羽状文や爪型文、貝殻の縁でひきかいたような条痕文などを有する縄文式土器の破片が沢山あった」（斉藤与1954）とあることから、北堀貝塚は縄文時代前期の所産であると考えられるようになり、『日本考古学講座』（藤森1956）や『新

版考古学講座』(鎌木1969)のような各概説書に於いても、北陸での縄文時代前期の代表遺跡の一つとして取り上げられ、地元でも「北堀貝塚は前期のものと考えられているものである」(斉藤優1960)のように扱われてきた。

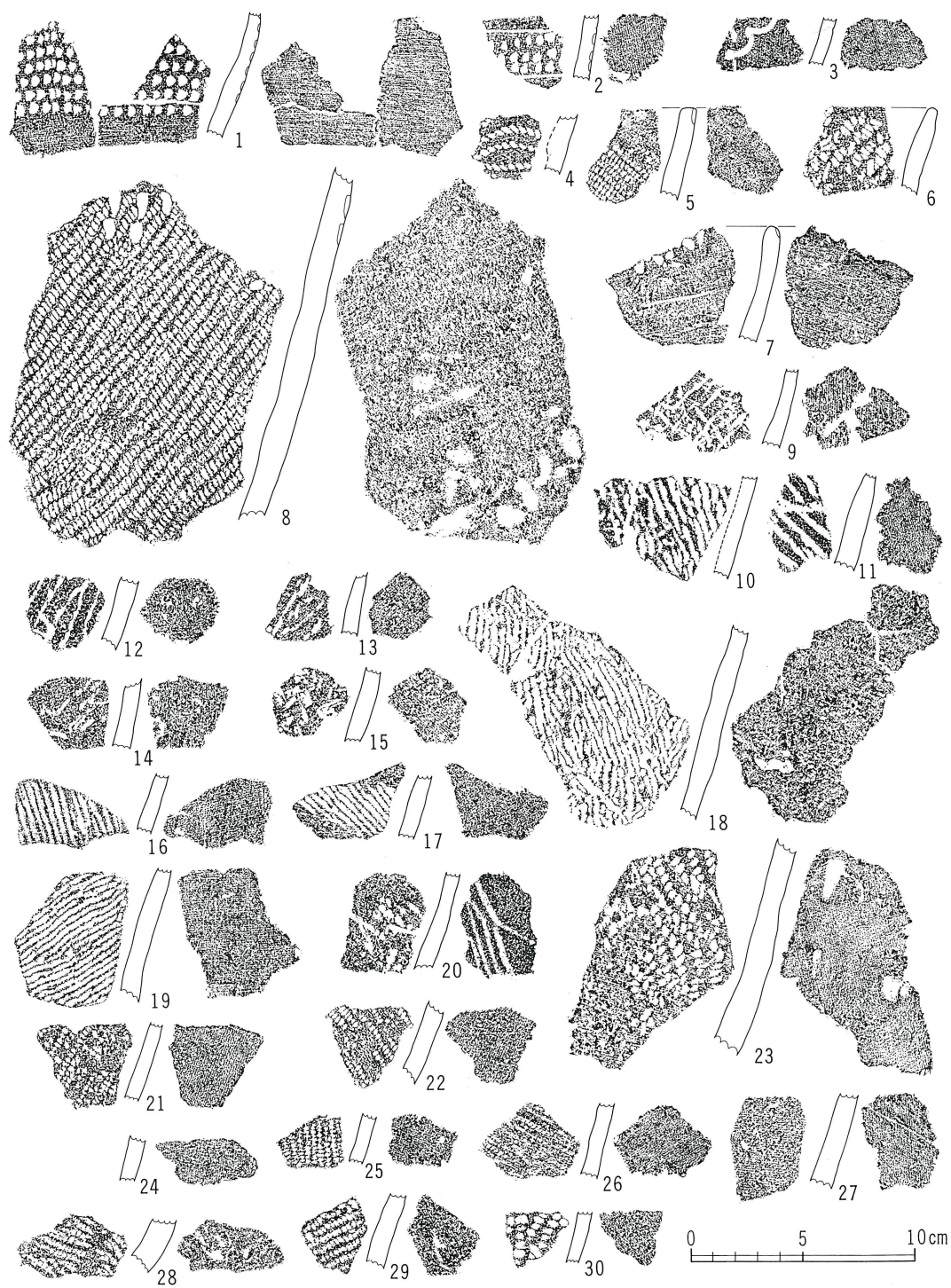
然るに、京都大学所蔵資料の解説に、「粕畑式に似た刻み目のあるもの、北白川下層式に似た条痕と連続爪形文のあるものなど縄文式早期・前期の破片」(横山・佐原1960)が存在していると解説されたことより、遺跡の帰属時期に幅のある可能性が現出してきた。また、「鳥浜と北堀からは北白川Ⅰ・Ⅱ式土器が出土している。北堀貝塚には尖底の発見が報告されているが、いずれにしろ、この三貝塚は早期末から前期中葉までにつくられた」(高堀1965)ように考えられ、かつて弥生式土器とも解された底部片にも再度着目されることになった。福井考古学研究会が提示したサンドボンブによる浚渫で出土した遺物中にも、東海系の早期末に相当する資料(沼1969)が混在する。

それらについては、「北白川Ⅰ・Ⅱ式土器を出土したといわれている福井市北堀貝塚から、甲小寺遺跡出土土器に類似する縄文、押捺縄文が出土」(四柳1972)したとされ、柴山潟湖底縄文貝塚の報告(沼田・小村1973)にも、同時期の遺跡の一つとして数えられている。『福井県史』、『福井市史』に提示された福井市安居公民館蔵品は、「おおむね早期末の縄文、条痕文系の土器と前期前半の土器で占められる」(南1990)ものと考えられ、土器への石膏質の付着物は貝層中に包含されていたことを推測させるに十分たりうる。

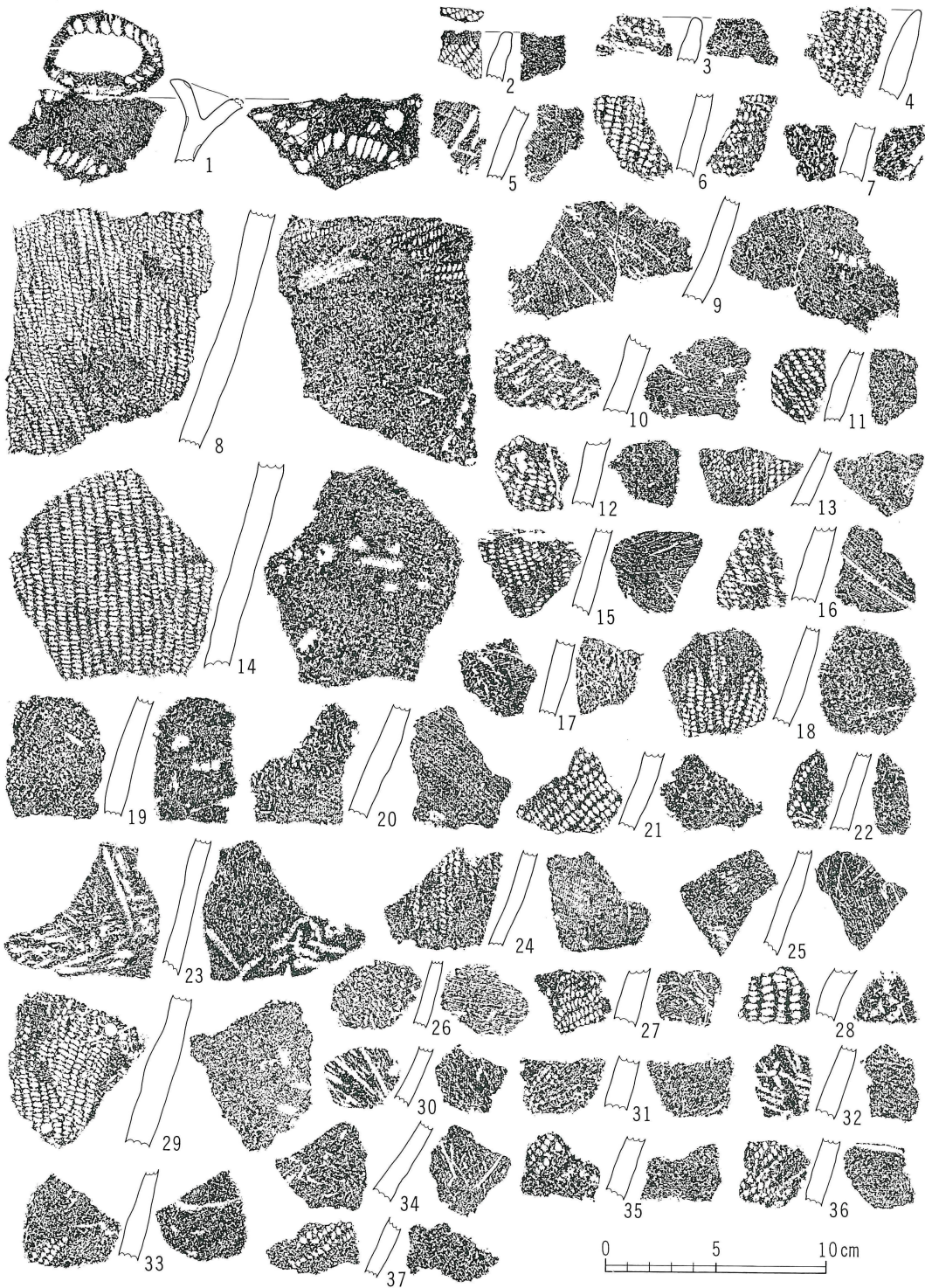
また、鈴木保彦は草創期の土器を出土した遺跡の一覧表に、「No.14」として北堀貝塚を爪形文の出土する遺跡の一つに数えあげ(鈴木1982)、加えて昭和61年(1986)埼玉県立博物館で開催された草創期のシンポジウムの折、配布された全国の地名表(埼玉考古学会1986)には北堀貝塚が記載されていた。このことは、北堀貝塚の時間的位置が遡上する可能性を示唆したものと言えよう。かくして『縄文土器大観』の「様式毎の遺跡分布図」に於いて、北堀貝塚は「条痕文系土器様式」(谷口1989)の遺跡としてのみ記載され、「北白川下層式土器様式」や「諸磯式土器様式」の項に於いて、越前の遺跡としては双方とも三十八社遺跡のみが記載されて、北堀貝塚は除外されることとなった。

2 北堀貝塚出土の縄文土器

ここで、これまでに採集された本遺跡採集の土器について触れることとする。第13図1～30は福井市安居公民館、第14図1～37・第15図1～11は福井市郷土歴史博物館、第15図12～15が福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管されている資料である。福井市安居公民館及び福井市郷土歴史博物館保管資料は、昭和40年(1965)に実施された河川浚渫の際、出土・採集された遺物であり、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター保管資料は、昭和59年(1984)に行われた河川改修工事に伴い、埋蔵文化財調査センターが実施した立会調査の際、日野川旧河道左岸の攪乱層中より出土したものである。その他、図示しなかったが、京都大学文学部博物館資料(横山・佐原



第13図 既存の資料(1) (縮尺1/3)



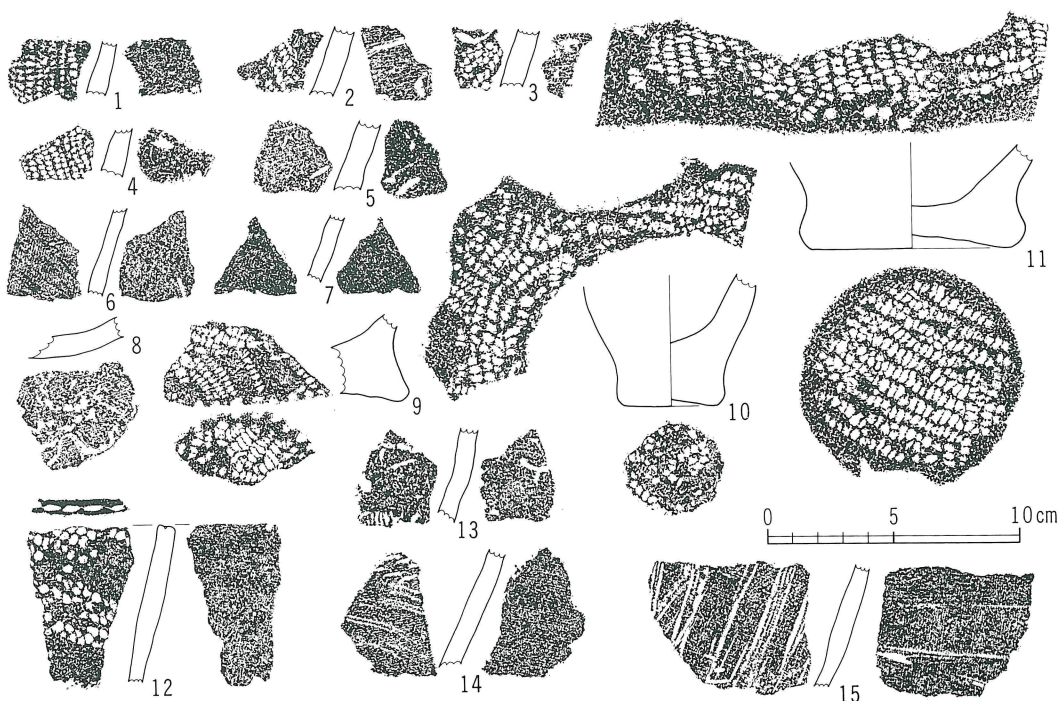
第14図 既存の資料(2) (縮尺1/3)

1960)、三国高校郷土資料室資料（南1986）、長谷川陽子採集資料（南1990）を現認出来る。

第13図1～30は福井市安居公民館保管資料であり、前述のように（南1986）、（南1990）でも既に紹介されている。

1は小型の連続D字形爪形文を多段に横走させ、2は沈線区画内に3段に横走させている。ともに内外両面に条痕調整を加えていて羽島下層Ⅱ式に含まれよう。3には斜行するコンパス文が施され、条痕調整はない。有尾式との関連が想定される土器である。4は縄文原体が胴側部に押圧されている。5・6は縄文施文の口縁部片で、5の口縁部外側には刻みが加えられている。7は丸く収める口端部に、刻みを加える無文の波状口縁部片である。内外両面には浅い擦痕状の条痕調整が加えられている。8は破片上端に列点状の横走する刻み目を加える体部片であり、器表にはLRの縄文が施されている。また、胎土には繊維が混入され、貝層中に遺存していたためと思われる石膏質の付着が著しい。9～11・16～18には撚糸文が施され、12～15にはハの字状の爪形文が施文される。19～25・28～30は縄文を施す土器片で、26・27は無文で擦痕状の条痕調整が加えられている。これらの体部破片には繊維の混入が認められるものが多く、早期末葉から前期初頭の所産と考えられよう。なお、土器以外の保管資料としては、磨製石斧2点と人骨・獣骨・貝類等の自然遺物がある。

第14図1～37及び第15図1～11は福井市郷土歴史博物館資料であり、以前（沼1969）によって紹介されたものを含んでいる。



第15図 既存の資料(3) (縮尺1/3)

第14図1は口縁部に盃状の把手を加え、口端部には刻みを施す。把手下の内外両面には弧状の刻み目列を加え、胎土に繊維を含む口縁部片である。東海地方の早期後葉、粕畑式に相当しよう。第14図2～4は縄文を施文する口縁部片で、2は口唇にも縄文が施され、4は丸く収める口縁部を保持している。第14図5・23・30・32には撚糸文が施され、23は裏面にも同様に施文されている。第14図6～8・10～16・18・21・22・24・27～29・33・35～37、第15図1～4は縄文施文の土器で、6～8には裏面にも縄文が施されているが、部分的・散漫な施文に止まる。15・16は裏面の条痕調整が著しい。第14図9・17・19・20・25・26・31・34、第15図5～7は表裏とも、無文もしくは細かく浅い縄文が僅かに施された土器である。9・19の裏面には圧痕状の縄が見受けられ、34はハの字状に擦痕が横走している。第15図8～11は底部片であり、8は丸底、9～11はやや上げ底となる平底の底部で、平底の底部にはいずれも胎土に繊維を混入していて、底面にも縄文を施すことを通例としている。なお、他に大型の磨製石斧や、人骨・獣骨・魚骨・貝等の自然遺物が保管されている。

第15図12～15は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが保管する資料である。

12の口端部には結節沈線が加えられ、体部表面には縄文RLが施されている。13は段状に屈曲して、破片上端にはハの字状の爪形文、下端には細かなC字状連続爪形文が施されている。また、両者とも胎土には若干の繊維が混入されている。14の上端には2列の爪形文が施され、15とともに表裏面に擦痕状の条痕調整が加えられている。

また、図示しなかった資料のうちで京都大学文学部博物館資料については、(南1986)に3点の拓影が掲載されているが、「粕畑式に似た刻み目のあるもの、北白川下層式に似た条痕と連続爪形文のあるものなど縄文式早期・前期の破片」(横山・佐原1960)とされたものがこれにあたる。三国高校郷土資料室資料についても、(南1986)に6点の土器の写真が掲載されている。1点は爪形文土器であり、4点には縄文が施されている。もう1点は半截竹管施文の土器片で、時間的な幅を保有しているようである。長谷川陽子採集資料については、(南1990)に人骨と5点の土器が図示されている。5点の土器はいずれも縄文施文の土器であり、うち1点の裏面には条痕調整が著しい。その他、(上田1918)に掲載されたスケッチからは、爪形文土器等の存在が窮え、(上田1920)・(上田1933)の写真にはスケッチされた土器とともに、尖底の底部やループ文が施された様なものも見ることが出来る。

3 該期の県内及び周辺の様相

このように現存する北堀貝塚出土土器を再見した結果、従来言われてきた前期後半の北白川下層式土器以前の、早期末の条痕文系土器や前期前半の土器群の存在を確認することが出来た。しかし、越前に於ける早・前期の様相については、遺跡数の僅少なことも相俟って、不明な点が多く残存している。

南は『福井県史』に於いて越前を概観し、早期の遺跡として北堀貝塚を含んで8ヶ所を確認

(南1986) している。そのうち勝山市古宮遺跡では、山形押型文、楕円押型文、格子目押型文等が出土していて樋沢式並行の所産とされ、少量の繊維を含む厚手の斜縄文土器は茅山下層式類似土器と考えられた(渡辺1978)。また、大野市花房遺跡、勝山市破入遺跡、同幕根遺跡、同三室遺跡、丸岡町銭瓶古墳封土中等からは高山寺式の粗大な楕円押型文が出土しており、破入遺跡では田戸上層式系土器及び撚糸文土器と共存したと想定され(仁科1977)、三室遺跡でも撚糸文土器が中・後期の包含層と分離して下層より出土した(仁科1984)。更に、和泉村後野遺跡では繊維を混入した厚手の土器群を抽出して、早期に位置付けられている(桜井1978)。このように、後半期の押型文土器を中心として出土する遺跡では、北堀貝塚以外の殆どが、奥越の河岸段丘上を中心として立地していることは注目されよう。

(南1986) の前期については、北堀貝塚以外に10ヶ所を確認しているが、福井市三十八社遺跡、同小縄遺跡以外は表面採集に依る断片資料や、中期以降の後代に継続する遺跡の資料中に、該期資料が僅かに混入しているに過ぎない。小縄遺跡についても北白川下層Ⅱ式以前にまで、遡ることが出来るかどうかについては確証が無く(木下・工藤1982)、該期前半の遺跡としては、勝山市古宮遺跡、福井市三十八社遺跡を挙げるに止まっている。このうち古宮遺跡については、石川県甲・小寺遺跡にその類例を求めて極楽寺式類似土器とされ(渡辺1978)、三十八社遺跡第8層(黒褐色粘質土)からは、「清水ノ上Ⅱ式(縄文前期) 北白川下層Ⅰb式(縄文前期) 北白川下層Ⅰa式(縄文前期) 羽島下層Ⅱ式(縄文前期)」(堅田1986)等の土器が出土している。

これに対して若狭の鳥浜貝塚では、早期末の条痕文系土器は滋賀県石山貝塚出土の諸型式が混在して出土し、共伴する縄文施文土器が量的には条痕文系土器を凌ぐものとされ、前期前半では在地の主体的な土器と考えられる条痕調整の土器が、東海地方の清水ノ上Ⅰ式や、九州の轟B式に系譜をもつものと共伴し、北白川下層式系の祖型をなしているものと想定されている(森川・網谷1986)。

北陸の早・前期の様相については、その境界に不明な点が多い。早期末から前期初頭にかけては、「佐波式」(橋本1966)と「極楽寺式」(小島1965)が設定されているが、型式内容に近似する点が多く、その位置付けと差異については判然としない点があった(高堀1965)。そうした点を受けて、四柳嘉章は佐波、極楽寺の両遺跡出土土器に、柴山潟底貝塚出土土器をも併せて検討した結果、山内清男博士以来、前期に位置付けられてきた極楽寺式(高堀1955)から佐波式を分離せず、またかつて同一原体による羽状縄文を形成する土器を「小寺Ⅰ式土器」と仮称して佐波式土器に先行させる考案(四柳1967)をも撤回して、柴山潟底貝塚出土土器を併行させ、これらを「現状では極楽寺式土器の範疇に含めて把握した方がよいように思える」とした。こうして、両型式ともに前期初頭に位置付けることで、「極楽寺式土器—甲・小寺遺跡の後出土土器—鳥浜式土器^⑧」(四柳1972)という北陸前期の編年序列を想定した。ここでは近畿、東海地方の入海式、石山式の影響に対する高堀等との評価の差異によるものがあることが勘案されよう。

これに対して、橋本正は前期の土器群について範型と様式という概念で細別し、胎土に繊維が

混入されることの有無に依って前後に二大別し、佐波遺跡の貝殻条痕系土器群を早期後半に位置付け、縄文系土器群を内面の貝殻条痕の有無で前期前半を2群に細別した。そして、このような様式の枠に於ける時期設定から、「北陸含繊維系土器第1様式、第2様式、第3様式、第4様式（未確認）と仮称」（橋本1972）することを推論した。北堀貝塚の名は、「佐波式（極楽寺式）遺跡分布図」（土肥1983）でも図示され、同書で四柳は能登の早期末～前期初頭について、（小寺I期）とした早期末に外来系土器群の存在からその様相を推定し、前期前半の極楽寺式土器（佐波式土器）を二分している（四柳1983）。

一方、富山県では南太閤山I遺跡から出土した早期末葉～前期前葉の土器を、山本正敏が2群22類に分類して、早期末に南太閤山S、前期初頭に南太閤山Z I・Z IIという時期区分を行った（山本1986）。しかし、これは（橋本1972）の想定をそのまま踏襲するものであり、石川県で論議されている、佐波式土器と極楽寺式土器の差異と類似性についての問題についてまでは言及されていない。

こうした現状について、『真脇遺跡』で高堀は「古い世代の研究者は、かつて早・前期の区分を、当時の学界の趨勢に従って、尖底の有無をもって分けていた」と回顧し、編年表でも石川に「佐波式」、富山に「極楽寺式」を併置して、資料の集積を課題（高堀1986）とした。このように、石川・富山の両県に於ける早期末・前期初頭の型式設定の齟齬は解消されないままとなっている。また、同書の「前期前・中葉型式分布図」に、北堀貝塚は「朝日C式」の遺跡として掲載された。

4 北堀貝塚出土土器の位置付け

先に現存する貝塚出土土器について、第13～15図に掲載し解説を加えたが、第14図1の盃状の把手を保持する粕畑式土器、第13図1・2のD字形爪形文を横走させる羽島下層Ⅱ式土器、同3のコンパス文の有尾式類似土器、同4の押圧縄文土器、同12～15・第15図13・14のハの字状の爪形文土器以外の土器については、中々に時期的な定点を求めにくい側面が残存する。しかし、こういった状況は前述してきた北陸の状況に通有なものであり、これをもって該期の考案に障害を生じさせるものではなかろう。外来系土器群の把握と、在地性の対比の検討法こそがその鍵であることは、これまでも諸氏により提言され続けている。

一度は草創期の所産とも想定されたハの字状の爪形文土器ではあるが、第15図13に見られるような他の文様との共伴施文や、能登での遺跡に於ける事例等を参考^⑧として勘案すれば、想定される時期は下降するであろう。しかし、早・前期のどのような時期に北陸でこうした施文技法が復活したのかについては、不明な点が残存する。その外の有文土器については、粕畑式は早期後葉に、羽島下層Ⅱ式、有尾式、押圧縄文は花積下層式併行のようにいずれも前期前半に位置付けられようが、さすればその他の縄文系、撚糸文系土器群の存在位置が問題となることは自明であろう。

そこで早期後半の条痕文系土器群についてみれば、前半の野島式・鶴ヶ島台式・茅山下層式等

の型式群は広い分布範囲を有するものの、後半には南関東を中心とする地域に分布圏が狭まり、東海には入海式・石山式のような類似型式が成立して、東北には列島のなかで最も早く縄文施文が定着した縄文尖底系土器が出現し、北近畿の京都府宮ノ下遺跡（岡田1957）でも条痕文土器と単節斜行縄文土器が共伴する。これが越前・若狭・丹後といった日本海側の地域に共通の様相といえよう。これまでは比較的対比することが容易であったと考えられた条痕文系土器について、東海と比較対照され、それを以て該地の様相に引き当てられることが時として散見された。しかし、先にも外来系土器と在来系土器との関係について若干触れたように、そのみを以て論じることは妥当性を欠くこととなる。

一方、条痕文系土器の存続については、前期の時期まで下降するかという課題とも関連して考察する必要がある。澁谷昌彦は静岡県木島遺跡の報告で、東海条痕文系土器である天神山式以降の木島式を細別し、南関東の神之木台・下吉井式との型式分類や編年的位置付けについて考察（澁谷1983）している。そこでは、木島Ⅲ式と下吉井式からを前期とすることが主張されていて、花積下層式についても縄文原体の側面圧痕文の変遷に注目して3細分（澁谷1984）されている。このように関東では、花積下層式の発生を以て縄文前期を画するようになり、従って東海では何を以て前期の成立を規定するかが課題となってきた。先に問題視した縄文・撚糸文系土器については、東北地方北部を中心として表裏縄文系土器が早期後葉に位置付けられ、胎土への繊維の混入と底部形態の変化によって土器型式の一大転換点が認識されていた。そうした後に縦走撚糸文の盛行する時期の存在することが想定され、前期に入って羽状縄文の発達を特徴とする土器群の存在が明らかになってきている状況にある。

そこで、現認される北堀貝塚採集土器は、現在主に福井市安居公民館、福井市郷土歴史博物館、福井県埋文センターに分散しているが、このうち安居公民館、郷土歴史博物館保管資料は略同時期に採集されたと考えられる。そこで、まずこの両者を対比してみることでその様相を検討してみる。安居公民館保管資料の有文土器は、D字形爪形文やコンパス文を保持する土器であり、これまで前期前半に比定されてきた。これに対して郷土歴史博物館保管資料には粕畑式を一点確認できるのみであり、他はともに前述した爪形文、縄文、撚糸文を施す土器群を包括している。このように、安居公民館と郷土歴史博物館の保管資料を比較すると、時期を確定することが出来る遺物については、その帰属する位置が若干異なるようにも見える。既に小論してきたように、これまで日本海側の富山県から島根県にかけては、胎土に繊維を含み、内面に条痕、外面に縄文を施す土器と、表裏ともに縄文を施す土器が分布していて、それらは茅山式直後から石山式乃至前期初頭まで存続していたように想定（泉1979）され、条痕文系土器群との関係を云々されている。そこで、安居公民館資料の第13図3のコンパス文土器について、前に有尾式に類似する可能性について述べたが、純粋な有尾式にはコンパス文は存在しない^④ようで、むしろ関山・黒浜式系統からの直截的影響を考えたほうが良いかもしれない。同4の原体圧痕の土器についても、花積下層式の側面圧痕との関連が想起され、同12～15の爪形文について（山本1986）の状況と対比し^⑤

ても近似する。してみれば、同1・2のD字形爪形文が施される羽島下層Ⅱ式の編年の位置も鮮明となろう。

また、郷土歴史博物館保管資料では第14図1の盃状突起を保持する粘炷式土器が一点確認されるのみで、他に出土している土器の様相は安居公民館保管資料と略同一に近い。これは両者の帰属する時間幅に大きな隔たりを想定することなく、むしろそれらを系統的差異に起因するものと考えことに妥当性が高い。県埋文センター保管資料についても、昭和40年に実施された浚渫工事の際以前流出した土砂中に混在していた可能性を考え合わせれば、こうした想定はより現実的であろう。これらは（上田1920）・（上田1933）に提示された土器が関東の前期前半的色彩の強いものであることも傍証たりうると考えられる。

こうした諸事情と現存する資料の状況を勘案すれば、かつて前期後半頃と考えられてきた北堀貝塚の存続時期は、一度は東海条痕文系土器群の存在から早期末葉まで上昇し、爪形文の存在から草創期の可能性についても検討された。しかし、現存する土器資料の検討からは、その一括性について相当の確度で認定することが可能と思われ、ここでは北堀貝塚の現存資料について、前期初頭における各地域からの系統が混在する様相として一旦把握しておくこととしたい。そして、この状況は北陸に通有の事象であり、列島の過渡的側面を標徴する。逆説すれば早期末葉から前期初頭にかけての東西編年の過誤を是正する諸口たりうものとなり得ると確信される。

以上、北堀貝塚出土土器から派生する問題について、小考してみた。もとより当該地域における資料の希薄性の問題について解消されたわけではなく、以後に残存する課題は多い。それらについては今後継続して取り組んでいくことで、今回小論する際お世話になった方々への謝辞にかえたいと思う。なお、研究業績としての取扱から諸氏の敬称は略させて戴いた。非礼は深謝する。

注

- ① 北堀貝塚から出土しているとされた甲・小寺遺跡出土類似土器に該当する例については、原資料の存在が明らかでない。「敦賀市郷土博物館資料、沼田啓太郎氏の拓本による」（四柳1972）とされているので、未だ現認していない資料が存在しているのかも知れない。
- ② この頃仮称されている鳥浜式土器とは、北白川下層Ⅰ式と区別される貝殻条痕系土器群を認識しようとしていたようである。前代との転換点を設定しようとしたのであろうか。
- ③ これまで列島に於ける草創期編年を考える際、日本海沿岸に突発的に散見される爪形文を施文する土器の存在について、その規定に論議があった。近年の出土例は略その時期を限定することを可能としているようである。
- ④ 有尾式について、埼玉県白岡町教育委員会、奥野麦生氏よりご教示を得た。
- ⑤ 「ハ」の字状の文様について、南太閤山Ⅰ遺跡では刺突文の一類型として把握されていて、清水ノ上Ⅱ式との関連を予想している。

引用文献

- 上田三平(1917)：「越前國丹生郡西安居村北堀の石器時代遺蹟に就て」『考古學雜誌第七卷第七號』
- “ (1918)：「再び越前北堀の貝塚に就て」『考古學雜誌第八卷第九號』
- 上田三平(1920)：「北堀介塚及び米ノ浦遺跡」『福井縣史蹟勝地調査報告第一冊』福井縣内務部
- “ (1933)：「北堀貝塚」『越前及び若狹地方の史蹟』三秀舎
- 横山浩一・佐原真(1960)：「福井市北堀町北堀貝塚」『京都大学文学部考古学資料目録第1部』 京都大学
文学部
- 沼弘(1969)：「北堀遺跡」『福井県における縄文式土器集成』福井考古学研究会
- 南洋一郎(1986)：「北堀遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県
- “ (1990)：「北堀遺跡」『福井市史 資料編1考古』福井市
- 斉藤与次兵衛(1954)：「北堀の貝塚」『伊井村誌』伊井村役場
- 藤森栄一(1956)：「各地域の縄文式土器 中部」『日本考古学講座 第三卷 縄文文化』河出書房
- 鎌木義昌(1969)：「縄文前期文化 西日本」『新版考古学講座 第3卷 先史文化』雄山閣出版
- 斉藤優(1960)：「北堀貝塚と石器時代遺物」『丹生郡誌』丹生郡町村会
- 高堀勝喜(1965)：「縄文文化の発展と地域性 北陸」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房
- 四柳嘉章編(1972)：『甲・小寺遺跡―能登における縄文前期初頭文化の研究』穴水町文化財叢書第5
- 沼田啓太郎・小村茂ほか(1973)：「柴山湖底縄文貝塚の調査」『小松市立博物館研究紀要 第8集』小松市
立博物館
- 鈴木保彦(1982)：「草創期の土器型式」『縄文文化の研究 第3卷 縄文土器I』雄山閣
- 埼玉考古学会(1986)：『埼玉考古―埼玉考古学会30周年記念シンポジウム資料―』埼玉考古学会
- 谷口康浩(1989)：「条痕文系土器様式」『縄文土器大観 I 草創期・早期・前期』小学館
- 渡辺誠編(1978)：『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』勝山市教育委員会
- 仁科章編(1977)：『破入遺跡』勝山市文化財調査報告 第II集 勝山市教育委員会
- “ (1984)：『三室遺跡III』勝山市文化財調査報告 第6集 勝山市教育委員会
- 桜井隆夫(1978)：「土器」『後野遺跡』和泉村教育委員会
- 木下哲夫・工藤俊樹(1982)：「福井市深坂小縄遺跡試掘調査略報」『古代第73号』早稲田大学考古学会
- 堅田直(1986)：「三十八社遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県
- 森川昌和・網谷克彦(1986)：「鳥浜貝塚遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県
- 橋本澄夫(1966)：「石川県能登島町佐波縄文遺跡の研究」『石川考古学研究会々誌第10号』石川考古学研究
会
- 小島俊彰(1965)：『極楽寺遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 高堀勝喜(1955)：「先史文化」『能登―自然・文化・社会』平凡社
- 四柳嘉章(1967)：「石川県穴水町甲発見の縄文土器」『石器時代第8号』
- 橋本正(1972)：「縄文時代前期土器群の細別」『富山県埋蔵文化財調査報告書II』富山県教育委員会

土肥富士夫(1983):「小結」『吉田野寺遺跡－七尾南湾・西湾周辺の縄文前期遺跡－』七尾鹿島広域圏事務組合

四柳嘉章(1983):「能登における縄文早期末～前期中葉前半の編年について」『吉田野寺遺跡－七尾南湾・西湾周辺の縄文前期遺跡－』七尾鹿島広域圏事務組合

山本正敏(1986):「南太閤山Ⅰ遺跡出土土器の編年」『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)』富山県教育委員会

高堀勝喜(1986):「北陸の縄文土器編年」『石川県能都町真協遺跡』能都町教育委員会

岡田茂弘(1957):「京都府宮ノ下遺跡出土の土器」『貝塚第70号』

澁谷昌彦(1983):「神之木台・下吉井式土器の研究－その型式内容と編年的位置について－」『小田原考古学研究会々報11』

〃 (1984):「花積下層式土器の研究－側面圧痕文土器を中心として」『丘陵11号』

泉拓良(1979):「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集 1 日本原始』小学館

圖 版



(1)遺跡全景(南方空中より)



(2)ボーリング調査実施状況(東方より)

1～3：ムシオイガイ 層位：2－3番18層 倍率：×5	4：ゴマガイ 層位：2－3番18層 倍率：×5	5：キセルガイ類 層位：2－3番18層 倍率：×5
6～11：ヒメコハクガイの一種 層位：2－3番17層（8・9） 2－3番18層（6・7・10・11） 倍率：×5		
12・13：ヒメベッコウ属の一種 層位：2－3番17層（12） 2－3番18層（13） 倍率：×5	14・15：キビガイ属 層位：2－3番18層 倍率：×5	16：オナジマイマイ（破片） 層位：2－3番18層 倍率：×5
17～26：ヤマトシジミ 層位：2－3番18層 倍率：×$\frac{1}{2}$		27～33：マガキ（破片） 層位：2－3番18層 倍率：×$\frac{1}{2}$